日光海道
新田町入口

宇都宮の古道

宇都宮市教育委員会

表　紙

『宇陽略記』より

宇都宮市大通り5－2－10

高橋節子氏所蔵

文化財シリーズ第８号

宇都宮の古道

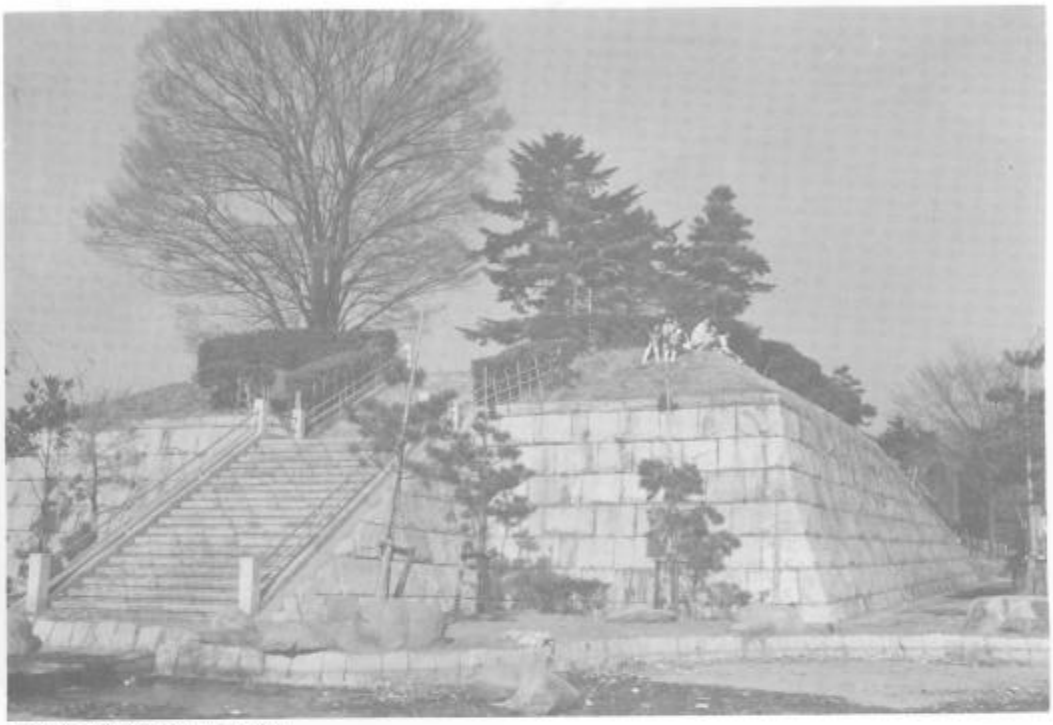
昭和60年３月

宇都宮市教育委員会

中徳次郎の宿－日光街道－（徳次郎町）

村はずれにある薬師道（東木代町）

大谷寺の千手観音（大谷町）



宇都宮城本丸跡（本丸町）

坂の上の地蔵尊（道場宿町）

上小池の杉並木－日光街道－（上小池町）

序　　文

文化財シリーズ第８号「宇都宮の古道」をおとどけします。
わが郷土、宇都宮は古代から下つ毛の国の中心として栄えてきたまちです。本市の今日に至るまでの共通した特色の一つとして各時代において常に陸上交通の要所としての地位を保ってきたことがあげられると思います。

具体的に申しますと、古代は蝦夷討征の拠点、中世においては東北への出入口、近世では江戸幕府が定めた五街道のうち日光・奥州両道が分かれる場所であったことなどがあげられます。

本市がこのように古来から交通の要所にあったことは、今日の市民性の最大の長所である“どこからやってきた人に対しても、分け隔てせず親切に迎える”という開放的性格を生みました。これは、一朝一夕に根付いたものではなく、いわば歴史の中で“陸の港町”、のような位置にあった本市の特性から自然に芽ばえてきたものなのです。極言するならば、この誇るべき長所は「道」が与えてくれたものといえるのではないでしょうか。

現代に生きる私達は、この事実をしっかりと胸に刻み、伝統を受け継ぐだけでなく、更にこの長所を伸ばしていきたいと思います。これは、本冊子を発刊した大きな目的の一つですので、どうか多くの市民の皆様の目にとまり、私達のまち「宇都宮」をより深く理解していただき、一層愛着を寄せていただくための一助となれば幸いと存じます。

終わりに、本冊子の刊行に際して調査にあたっていただいた本市文化財調査員の方々をはじめとして、御協力くださいました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和60年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　後藤一雄

目　　次

序　　文
まえがき …… 1
1　古道のとらえ方 …… 2
2　古代の東山道 …… 4
3　中世の鎌倉街道 …… 7
4　近世の道
(1)　城下の道 …… 10
(2)　奥州街道 …… 17
(3)　日光街道 …… 22
(4)　脇道
①　石井道 …… 38
②　道場宿道 …… 41
③　真岡道 …… 44
④　上三川道 …… 46
⑤　鹿沼道 …… 50
⑥　佐野道 …… 56
⑦　駒生道 …… 59
⑧　文挟道 …… 60
⑨　新里道 …… 62
⑩　大網道 …… 64
⑪　篠井道 …… 66
⑫　羽黒道 …… 68
⑬　砂田道 …… 73
⑭　長岡・川俣道 …… 74
⑮　平出道 …… 76
⑯　市兵衛道 …… 77
⑰　たつ街道 …… 78
(5)　城道
①　根古屋城への道 …… 82
②　飛山城への道 …… 83
(6)　信仰の道 …… 84
①　大谷観音への道 …… 84
②　多気不動尊への道 …… 86
③　安産稲荷への道 …… 89
④　御岳神社への道 …… 90
⑤　成願寺への道 …… 91
⑥　茂原観音への道 …… 92
あとがき …… 93

ま　え　が　き

本冊子は、昭和58年度に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け市文化財調査員活動の一環として実施した「古道調査（課題別文化財一斉調査）」の結果をもとにしてまとめたものです。

同調査は、市内全域を対象にして実施した結果、56件が報告されました。

しかし、20名の調査員の「古道」に対する基準がそれぞれ異なることから本冊子への掲載にあたっては、事務局（市教育委員会社会教育課）職員が調整するとともに報告になかったものも一部収録しました。

また、報告されたもので本冊子の本編に収録しなかったものについては「1．古道のとらえ方」の中に参考資料として掲載しました。

なお、「古道調査」は、次の組織で行いましたが、特に松本尊弘、細谷邦夫、増渕オイ、沼子キミ、吉川リエ、本多晃の各氏の協力を得ました。

※　本文中、古道のルートを示した地形図の縮尺は全て2万5千分の1です。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

○野中退蔵（委員長）　雨宮義人（副委員長）　岩崎良能（委員）
森谷憲（委員）　○冨祐次（委員）　谷田部康幸（委員）
塙静夫（委員）　阿久津浩（委員）　小堀時蔵（委員）
戸田博亘（委員）

●宇都宮市文化財調査員

○黒川孝三（一条）　塚田宗雄（陽北）　加藤康照（旭）59.9退 9任
内藤二郎（陽南）　石川秀男（陽西）　釜井宗一（星が丘）59.9退 9任
松本文一郎（陽東）　平塚良雄（泉が丘）　粂川弘明（宮の原）
菊池正仁（平石）　田中親明（清原）　増渕藤四郎（横川）
坂寄悦男（瑞穂野）　小林哲夫（豊郷）　半田勝（国本）59.3退 3任
高山伝治（城山）　福田操（富屋）　◉阿久津義正（篠井）
松本笑悦（姿川）　小島豪市郎（雀宮）　酒井光一（旭）59.10新 10任
高藤常松（星が丘）59.10新 10任　小塚博（国本）59.4新 4任

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

加藤悦男（社会教育課長）　○小林錦一（文化振興係長）　○定岡明義（文化振興係）
◉手塚英男（文化振興係）　○梁木誠（文化振興係）　阿部信弘（文化振興係）
吉澤洋子（文化振興係 嘱託）　山中洋子（文化振興係 嘱託）

○印＝企画編集（◉主任）

1．古道のとらえかた

本書は、宇都宮市文化財調査員活動の一環として実施している「昭和58年度課題別文化財一斉調査」のテーマ『宇都宮の古道調査』の結果を中心にまとめたものであり、調査要領は次のとおりである。

〈古道調査要領〉

1　目　的

古くから人々の生活に不可欠であった道は、その土地の人々の歴史を刻み、その時代を生きた人々に多くの恵みを与えてきた。

しかし、これらの道は、常に人々の生活と一体をなしてきたために社会や生活の変化によって、失われ、忘れ去られようとしている道も少なくない。

そこで、本年度は、失われつつある古道を総合的に調査し、記録保存する。

2　調　査　対　象

古道とそれに関する歴史的事物を調査する。

(1)　古道

ア　特別な呼称のある道

イ　いわれのある道

(2)　歴史的事物

町並み(宿場)、石仏、道標、一里塚、塚、並木、河岸、神社、仏閣、地名、古地図、伝説、城館跡等

3　調　査　方　法

(1)　調査

調査は、実際に現地において路線等を確認のうえ行うものとするが、聞き取り調査等も活用する。

(2)　まとめ

別添「調査用紙」に調査結果を記入するとともに、その路線、所在地を1/25,000の地図に明示する。

(3)　調査地区

調査地区は、原則として、調査員

昭和58年度課題別文化財一斉調査　古道調査　調査用紙　整理番号

古道名		起点～終点	～	調査地	
古道の略地図と具体的事物					
古道の由来					
古道の景観写真					
参考文献の書名等				調査者	

の担当区域内とする。

ただし、路線が隣接区域にまたがる場合は、隣接の担当調査員と連絡・調整のうえ調査を進めるものとする。

上記要領により古道調査を実施したが、調査以前から古道をどの範囲でとらえるか、いつごろまでの道を古道とするかなど次のような問題点が指摘されていた。

- 時期（時代）的に、古道をいつまでにおさえるか。
- 改修・整備をした古道の取り扱いをどうするか。
- 古道として伝承されていても、正確なルートをつかめるか。
- 狭い地域（旧大字単位）に残る生活道の取り扱いをどうするか。
- 同じ道であっても、地区によって違う名称をどうするか。
- 軌道敷跡・軍道等の取り扱いをどうするか。

これらの問題点については、調査員の判断にゆだねるといういわば棚上げした状況で調査に踏み切った。その結果、調査員から提出された調査内容は当然の事ながら統一性を欠くものであった。そこで、本書の作成に当たっては、およそ次の掲載基準により編集することとした。

- 本書で取り扱う古道は、江戸時代以前までに敷設されたものとする。
- 近代的に改修・整備された古道であっても、著名なものは掲載する。
- 狭い地域内の古道であっても、歴史的意義があるものは掲載する。
- 調査結果に加えて、書籍、文献等を参考にして解説を記述する。

なお、調査員から報告がありながら、本書に未掲載の古道は次のとおりである。

番号	古道名	起点～終点	調査地	番号	古道名	起点～終点	調査地
1	新地街道	ＮＨＫ支局～河原町	旭	8	トロ道	徳次郎～材木町	富屋
2	長岡脇道	長岡町	豊郷	9	栃木道	上欠町～栃木	姿川
3	日光街道（中道）	金沢～田野天王原	城山	10	元砥上駅の交通路	砥上駅～宇都宮	〃
4	結城街道	下福岡～古賀志	〃	11	戸長役場道	小川家～鵜田・上砥上 下欠・下砥上	〃
5	辰街道	野尻	〃	12	名主道	植木家～砥上・下砥上	〃
6	宇都宮軌道運輸と人車鉄道	宇都宮～城山	〃	13	成願寺道	さるやま町～成願寺	横川
7	大谷道	徳次郎～大谷	富屋	14	清原飛行場引込線	宝積寺～清原	清原

2．古代の東山道

我が国の道路は、律令国家成立以前にもある程度できあがっていたことは、古墳や集落跡等の遺跡の分布状態によって推測することができる。

しかし、全国的な規模で本格的な道路が整備されたのは、中央集権的な律令国家の事業としてであった。中央集権国家の確立をめざす大和朝廷にとって、都と地方を結ぶ道路の整備は、役人をはじめとする人々の往来、税や産物等の物資の輸送、軍団兵士の移動等のため不可欠な条件であった。そこで、大和朝廷は、都を中心として五畿七道を定め、地方の諸国を７つに区分した。

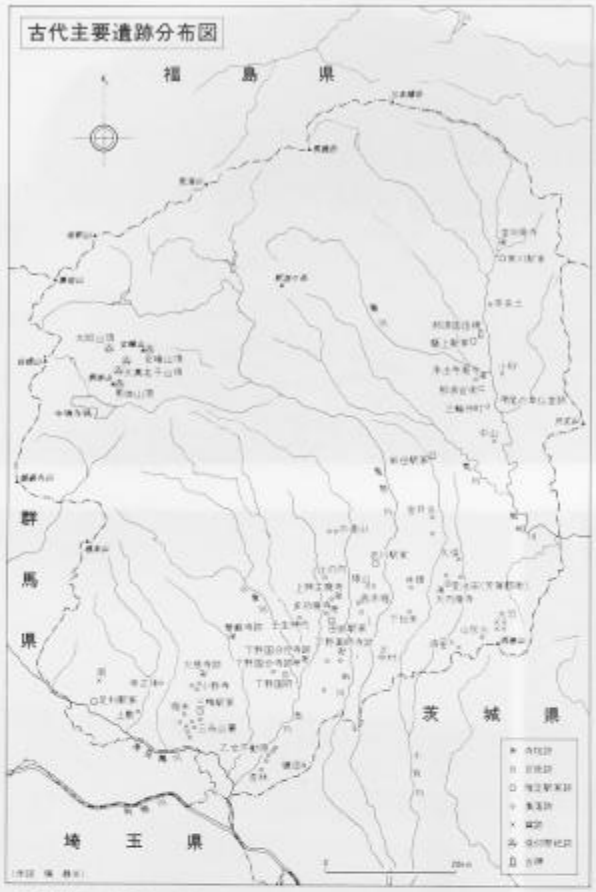
下野国は七道のうちの東山道に属し、蝦夷の征討と奥羽の開拓が律令政府の大きな関心事であったため、政治的・軍事的に重要な意味をもつ道であった。

以下、『うつのみやの歴史―昭和59年・宇都宮市―』の「東山道と衣川駅家」の記事を転載してみる。

「東山道は上野国の新田駅家（太田市）から下野国の足利駅家（足利市十念寺跡附近か）に入ると、これから東進して三鴨駅家（岩舟町畳岡附近か）に達し、ここから下野国府（栃木市田村町）に至り、思川を渡って下野国分寺・国分尼寺（国分寺町）附近を通過し、下野薬師寺（南河内町）まで北東進し、これから北進して田部駅家（上三川町多功附近）に至る。田部は田郡の誤記と思われ、田郡が多功に転化したのではなかろうか。東山道は田部駅家から北上し、多功廃寺（上三川町多功河内郡衙か）の近くを通って上神主廃寺（上三川町上神主と宇都宮市茂原町との境）に達するが、茂原町内には愛宕塚古墳・大日塚古墳・権現山古墳などが群在する。この辺りから北東進して田川を渡って東谷町内の笹塚古墳に至り、さらに刑部郷（『和名類聚鈔』記載の郷名）近くを経て衣川駅家に至ったと思われる。（中略）

8～9世紀の東山道（『宇都宮市史』第1巻より）

そこで衣川駅家の位置を、石井町の志峰寮東遺跡に想定してみたい。ここは宇都宮大学の南東約1.5キロの地である。この辺りは今はすっかり住宅地と化しているが、わずかに残る畑地には、奈良・平安時代の土器（土師器）片が散乱している。石井町内にはこのこ

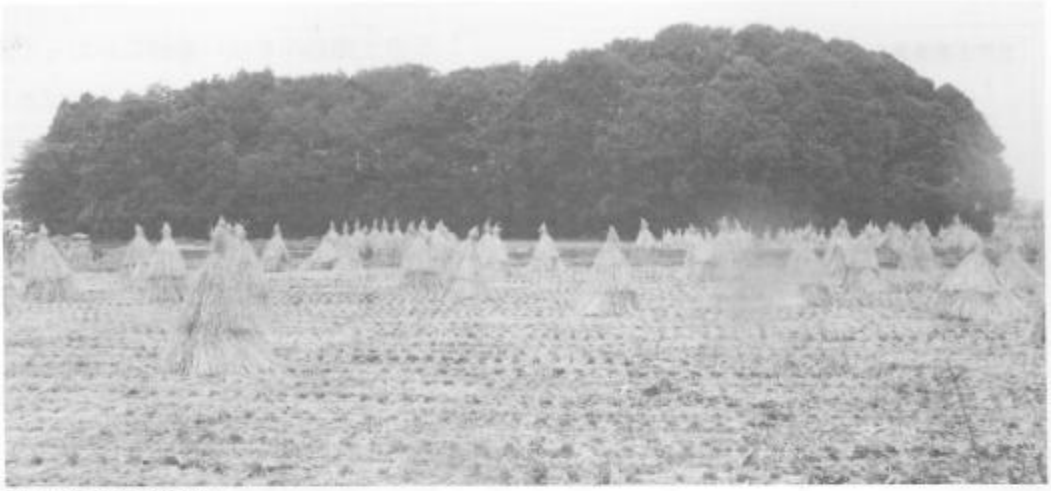


古代主要遺跡分布図（『角川日本地名大辞典』9 栃木県より）

ろの土師器片を広い範囲にわたって出土する遺跡はほかにない。そればかりか、石井町内には浅間山古墳・愛宕塚古墳などを中心とした久部台古墳群があり、衣川駅家の位置を考えるとき、その歴史的環境は十分に整っているといえる。

そこで東山道はこの衣川駅家から東進し、下川岸（鬼怒橋の南方約1キロ）辺りで鬼怒川を渡って鎧山に達し、清原中学校のすぐ西側を北進し、竹下浅間山古墳近くを通って板戸古墳附近に達した。この辺りから高根沢町石末を経て氏家町の八方口に至った。八方口の東方には廐久保という地名があるので、この附近に新田駅家が考えられる。ここから小川町三輪の式内社三和神社を約て北進し、那須官衙（小川町）に達し、浄法寺廃寺附近で箒川を渡り、上侍塚古墳・下侍塚古墳（湯津上村）の西側を通って、湯津上地内の磐上駅家に至り、さらに北進して黒川駅家（那須町）に達した。これから北東進して下野国から陸奥国に至った。」

上神主廃寺出土古瓦



笹塚古墳（東谷町）

瑞穂野団地東側の道（石井町）

鬼怒川下川岸（石井町）

竹下浅間山古墳（竹下町）

板戸大塚古墳（板戸町）

3．中世の鎌倉街道

建久3年(1192)、源頼朝によって鎌倉に幕府が開かれると、京都を中心とする関西地方に対して武家政権の根拠地として、東国地方も活況を帯びてきた。

鎌倉幕府にとって、幕府を支える御家人、特に東国に散在する御家人と鎌倉を結ぶ道は〝いざ鎌倉〟という時に速やかに御家人達が鎌倉に出向くことが必要であった。

そこで、幕府はこれらの御家人と鎌倉を結ぶ交通路の整備に力を入れた。これらの街道は一般的に鎌倉街道と呼ばれ、政治的・軍事的だけでなく経済的にも重要な機能をもっていた。

鎌倉街道－推定－
（とちぎの自然・歴史と自然のはなしより）

下野国には、宇都宮の北方、小山市の間々田・乙女・野木町などに鎌倉道と呼ばれる小道がわずかに残っている。

宇都宮の北部地区には、鎌倉街道、公方街道、頼朝街道と呼んでいるところがみられる。

○　文治5年(1189)、頼朝は陸奥国平泉の藤原泰衡を討つために鎌倉道を北上し、古多橋駅を通り、田川を北上したと思われる。

鎌倉幕府の史書である『吾妻鑑』をみてみると「7月25日、癸未、二品着御于下野国古多橋駅」とあり、近世の宇都宮城下小田町切橋（小田橋）に到

着と書かれている。古多橋は下河原の常念寺前の小橋と考えられている。

常念寺附近は、湧水がみられ、静御前が義経のあとを追って奥州へ落ちていく途中、喉が渇いて困っていた時、供の侍の亀井六郎が槍の先で大地をつくと清水が湧き出したといわれる伝説のあるところである。

○　羽黒街道を北上すると田川に鎌倉橋という名の橋がかかっており、すぐ近くには鎌倉坂という地名が残っている。そしてこの道にちなむ次のような伝説が残っている。

源平の争乱の後、源頼朝は弟の義経追討のため軍勢を率いて奥州に向かった折、この坂道でひと休みをし、手にした桜のムチをかたわらの地面にさしたまま立ち去ったが、不思議なことにそのムチが根を生じ、枝葉を繁らして大木となり、春にはみごとな花を見せてくれたという。

○　岩曽町の宇都宮製紙工場内を通り北に向かう。下川俣町の吉川さん宅は頼朝街道のくぼ地の中に建っており庭の中に段差がはっきりとみられる。沼子さん宅の果樹畑の中にもくぼ地として残っており、道は御用川で切られている。川俣町と海道町の境の農道となっている頼朝街道は白沢方面に続いている。

①　工場内に残る道

②　くぼ地となって残る道

③　屋敷の中に残る道

④　川俣東部を通る道

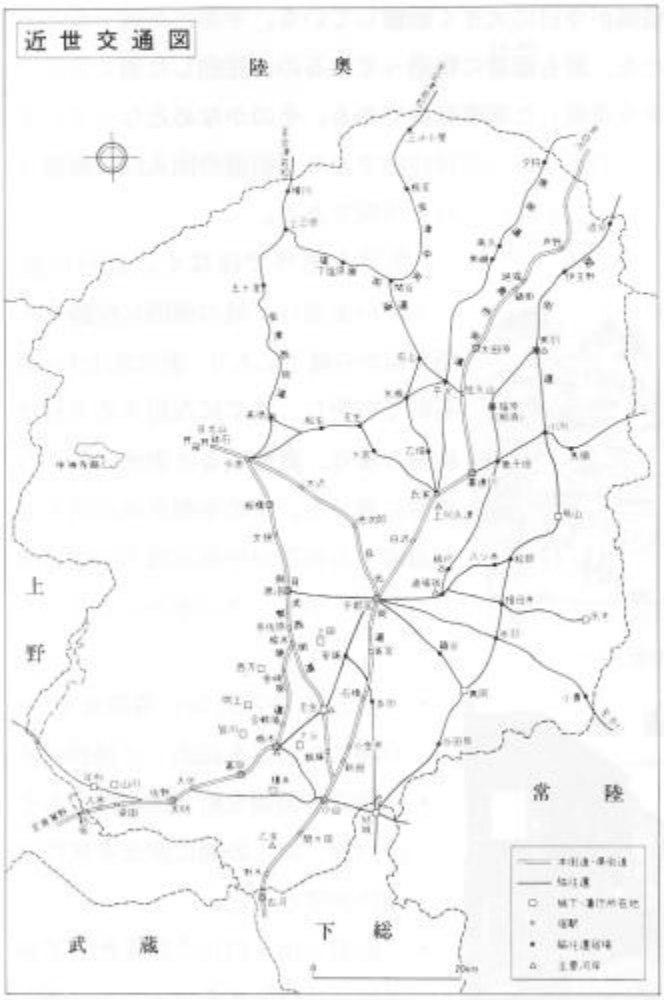
4．近世の道

徳川家康により江戸に幕府が開かれると、幕府は日本橋を起点として、東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道の五街道を設け、勘定奉行（道中奉行兼帯）の支配下においた。そして、一里ごとに一里塚を築き道しるべとし、街道の両側には、マツ、スギ、ヒノキなどの並木を植えて、旅人の行路に風情を添えるとともに、夏は休息の場を提供した。

また各宿場には、本陣、脇本陣、旅籠、問屋場などの施設を設け、特に、幕府役人や参勤交代の大名など支配者階級の利用を考えた整備を行った。

宇都宮は五街道のうち、主に将軍の社参をはじめとする参拝者のための日光街道と東北を結ぶ奥州街道が分かれる交通の要地であり、日光霊廟を守るばかりでなく、幕府の東北諸藩を統治するかなめとして軍事上も重要な位置にあった。このような中で、宇都宮の城下の道は歴代の藩主のもとで、徐々に整備されていった。特に、大規模な城内・城外の城割り・町割りを行ったのは「宇都宮の釣天井」の伝説を生んだ本多正純であり、現在の宇都宮市街地の基礎になっている。

宇都宮は、下野国の政治・文化の中心であり、日光街道・奥州街道以外に、東へ石井道・道場宿道、西へ大谷道・鹿沼道、南へ佐野道等が古地図にみられるが、これらの他にも近隣の各所に通じる道があったことはいうまでもない。



近世交通図（『角川日本地名大辞典』9 栃木県より）

(1) 宇都宮城下の道

(1) 道と城下

宇都宮は、古代、下野国河内郡池辺郷として産声をあげ、二荒山神社の門前町として発展し、平安時代末以後、宇都宮氏22代の本拠地として栄えるに至った。江戸時代になると、日光東照宮が建立され、幕府によって定められた五街道のうちの日光街道と奥州街道が分かれる交通の要所として重要さを加えるとともに、奥平・本多・松平・戸田氏等の城下町として繁栄を続けてきた。

現在の宇都宮の市街地は、近世の城下町の町割りを基礎としたものであり、特に元和5年（1619）の本多正純による城下整備が今日に大きく影響している。宇都宮が城下町として計画的に作られた都市であることを、最も顕著に物語っているのは屈曲した道である。城下町は要塞都市であり、城の防御を重視した軍事基地である。そのかなめとなっているのが道であり、道によって区分された武士や町人の居住地であり、街道の出入口に配置された寺院である。

古書にみえる日光街道出入口（『宇陽略記』より）

同・現在の様子

宇都宮も例外ではなく、江戸に通じる江戸街道は、城の南西に位置する南新町から城下に入り、更に北上し、新石町で右折し、すぐに左折すると日光街道となり、直進すると奥州に向かう街道に通じる。この宇都宮城の西と北を通過する街道が宇都宮城下の構造を決定づけており、次の事がいえるであろう。

- 街道は、宇都宮城に隣接せず、やや離れた地点を屈曲して通過する。
- 街道の両側を町人居住地としその内側、城との間に武士を居住させ防御壁とした。
- 街道の出入口に寺院を配して城を固める砦とするとともに、城下の内と外の区切りとした。

宇都宮は、戊辰の役と第2次世界大戦の2回にわたって戦禍をうけ、城を

宇都宮城下概要図

侍・足軽屋敷
町　屋
寺院・寺院跡
石垣・土塁
川・堀

宇都宮城下図

1 桂林寺　2 延命院　3 真福寺　4 正行寺　5 宝勝寺　6 心光寺　7 光明寺　8 粉河寺　9 浄鏡寺　10 能延寺　11 本願寺　12 慈光寺　13 成高寺　14 天勢寺　15 清巌寺　16 妙正寺　17 興禅寺　18 生福寺　19 法華寺　20 妙金寺　21 宝蔵寺　22 大運寺　23 安養寺　24 観専寺　25 光琳寺　26 報恩寺　27 一向寺　28 龍松寺　29 長楽寺　30 地蔵寺　31 台陽寺　32 大慈院跡　33 栄林寺　34 長福寺　35 盛久院　36 宗見寺　37 松岩寺跡　38 万松寺　39 英巌寺　40 常念寺　41 善願寺　42 生善寺　43 応願寺　44 林松寺

はじめ城下町の景観をほとんど焼失してしまい、更に新しい都市計画によって道も新設あるいは改修され近代都市に変ぼうしてきた。しかし、現在の宇都宮市街のベースは城下町であり、所々に城下町の名残がみられる。

(2) 屈曲した道

城下に出入する道の数は軍事上最低限にすることが望ましく、宇都宮の場合、江戸・日光・奥州の本街道及び近隣を結ぶ大谷道・鹿沼道・佐野道・石井道・道場宿道等があるだけである。これらの道は、城下に入ると複雑に屈曲し、万一、この道から敵が侵入したとしても城下へは直進できず、屈曲地点で防戦できるよう設定されている。

なお、奥州街道が杉原町で南下し城に近づいているのは、宇都宮大明神（二荒山神社）の門前を迂回したことによる。

古書にみえる旧蓬莱町附近（『宇陽略記』より）

(3) 道と町屋

街道が城下に入ると、道の両側に商家を中心とした町屋が軒を並べ、脇道以外に人々が左右においては通行することを阻んでいた。そのうえ街道沿いの町には、町境や脇道への出入口に木戸や自身番を設け、緊急時においては人の通行を遮断した。したがって、町屋は城内における最初の防御塀といえる。

同・現在の様子

(4) 寺院の配置

幕府が一国一城の制を定めると、本城を囲むように設置されていた出城は全て撤去された。城主は出城に替わるものとして、敵の侵略を受けた場合、兵士や武器・食糧を大量に持ち込むことが可能な寺院を街道の出入口に計画的に配置した。なお、宇都宮城下で寺院敷地は約15%を占めていた。

古書にみえる池上橋付近（『宇陽略記』より）

※　写真①～㉒の見出し及び解説には旧町名を使用した。

① 今小路通り

（今小路橋周辺）

② 元石町通り

（元古久稲荷）

③ 大町通り

（今小路通りから大町通りを望む）

④ 石町通り

（元穀物問屋の石蔵）

⑤　清巌寺通り

（鉄塔婆）―清巌寺―

⑥　寺町通り

（生福寺）

⑦　宮島町通り

（寺町から宮島町を望む）

⑧　池上町通り

（伝馬町から池上町を望む）

⑨　池上裏町通り

（東から西を望む）

⑩　小伝馬町通り

（蔵造の商家）

⑪ 千 歳 坂

⑫ 首 切 坂

⑬ 狸　　坂

⑭ 小 豆 坂

⑮ 松ヶ峰町

（武家屋敷風の家屋と庭園）

⑯ 河　原　町

（二股道）

⑰ 二　条　町

（屈曲路）

⑱ 四　条　町

（違い十字路）

⑲ 大　寛　町

（屈曲路と大クヌギ）

⑳ 大　寛　町

（観専寺を望む）

㉑ 二　条　町

（武家屋敷風の家屋）

㉒ 伊　賀　町

（屈曲路と古い倉庫）

(2) 奥 州 街 道

奥州街道が通じていたのはかなり古く、御室観音の伝説を宇都宮に残した征夷大将軍坂上田村麿呂の蝦夷征討の道、関沢の獅子舞の由来に残る平安末期の源頼義・義家の奥州平定の道、源頼朝・義経の奥州藤原氏間の道、芭蕉が通った奥の細道、そして、奥州諸藩の大名が参勤交代に通った道、これらの道が奥州街道と呼ばれている。

奥州街道は、江戸千住から陸奥三厩間までの約200里（約800km）を言う場合もあるが、一般的には、江戸から宇都宮を経て更に以北の白河の辺りまでを奥州街道としている。この奥州街道が、宇都宮から日光へと分岐したのが日光街道である。そして東照宮が造営され、将軍をはじめ大名以下の往来が頻繁になると、宇都宮以北の白沢、氏家、喜連川、佐久山、大田原、鍋掛、越堀、芦野、白坂、白河の10宿、約90kmの街道を厳密には奥州街道と言うようになり、江戸千住から宇都宮、日光間は日光街道と言うようになった。

① 旧奥州街道

元和元年（1615）日光街道が開通したため、奥州街道は南新町、材木町、池上町、鉄砲町、曲師町、日野町を経て、上河原町に至るようになったが、それ以前は、下河原、簗瀬村、宿郷村、押切を経て上河原に至ったものであり、これが古来、奥州への道筋となっていたものである（中河原を通ったこともある）。

『下野風土記』には、「宇都宮、ヲンタと言う所なり、川幅２間の川に石橋あり、是をコダ橋という、古への奥州海道なり」とある。コダ橋（古多橋・小田橋）は常念寺前、亀井の水の所にあった橋であるが、押切橋との説もある。

その道筋は、道路拡張、区画整理等のため当時の面影は失われたが、下河原、簗瀬村、宿郷村、押切を経て上河原町に至る道筋は一部失われた所もあるが、現在も残っている。

不動前の交差点を東に折れると、『宇陽略記』に「不動堂ノ東ノ森ニシテ、庭中古木森然トシテ四季ニ花有泉地に蓮を生ス見下セバ……」と書かれ、四季折々の花が咲き、近里遠境一望に見渡せる宇都宮第一の景勝地であったといわれる御山屋敷のあった所である。ゆるやかな坂をくだると亀井山常念寺があり、道の傍らには静御前のお供をした亀井六郎にかかわる

伝説をもち、古くから多くの旅人の喉を潤した名泉「亀井の水」がある。『下野風土記』において、コダ橋があったといわれる所は、このすぐ近くである。

宇都宮藩の御用米蔵のあった御蔵町の郵便局の所を東に折れ、田川を渡ると、宇都宮城の巽の守護として開山された光徳寺がある。

光徳寺の洗橋の辺りの道筋は、改修されてはっきりしていない。善願寺の西側を通り、押切橋を渡り、上河原へと続く。善願寺には市指定の文化財である銅像盧舎那仏坐像があり、「大豆三粒の金仏」として、昔から多くの人々に親しまれてきた仏様である。また坂上田村磨呂にちなむ伝説をもつ御室観音堂も境内にある。

① 南から常念寺前を望む

② 亀井の水

③ 光徳寺

④ 銅造盧舎那仏坐像

② 奥 州 街 道

宇都宮は、関東における東北への関門として、また幕府の奥の院である日光東照宮の入口としてきわめて重要な位置を占める所である。このような状況の中で宇都宮城主となり「釣り天井」の伝説の主人公になった本多正純は、宇都宮城郭の整備、日光街道の開設、奥州街道の付け替えなどの城下の大改造を行った。

このとき奥州街道は、不動前の所を右折して、下河原、簗瀬村、宿郷村、押切、上河原を経て博労町に達する経路から、南新町、材木町、池上町、鉄砲町、曲師町、日野町を経て上河原に至る経路となる。

現在、この道筋は、区画整理や道路拡張によって当時の面影は失われたが、日野町通りと今小路交差点、今小路通りと大町通りの交差点には城下町特有の曲折がそのあとをとどめている。また博労町商家や海道町の松並木にもわずかに昔の面影を残している。

日光街道と分かれる伝馬町は当時、旅籠屋、小間物屋、肴屋、造酒屋などが店を並べ、宇都宮で最もにぎやかなところの一つであった。池上町の朝日坂を下り、福田屋百貨店の東側の鉄砲鍛治の住んでいた鉄砲町を通り、曲げ物師のいた曲師町、日野商人が住んでいた日野町を出る所は、今小路通りとのT字路交差点になる。その交差点を左折して、右折すると大町通りに入る。すぐ左側には石の蔵がみられる。通りの南側にあたたかな夫婦愛の伝説をもつ「おしどり塚」がある。更に上河原の通りを北に向かうと、妙正寺前の直角に屈折したところがあり、昔の街道の名残をとどめている。左側に、市指定文化財の樋瓜氏の墓がある。田川にかかる幸橋を渡って博労町に出ると正面に、重厚な観音開きで豪壮さを象徴する鬼瓦を屋根にのせ昔の商家の姿を今日まで伝えている篠原家がある。

道を左に折れ北に向かうと道の左側に、宇都宮八代城主貞綱が開基した興禅寺があり、市指定の釈迦如来坐像が安置されており、また「訴人婆々」の伝説も残っている。右手にある八坂神社は、宇都宮宗円が宇都宮城築城の際、城の鬼門除けとして建立したと言われている。八坂神社の神楽は市指定の文化財になっており、2月28日、11月23日に奉納される。

今泉町の竹林十文字の住宅地の中に御上人塚と呼ばれる、約20mの江戸時代後期の塚がある。かつては、うっそうと竹が繁っていたことから地名がついたと言われる竹林は江戸時代、約200m余の家並が続いていたという。

竹林の十文字を越えると、街道に面して長屋門のある旧家が並んでいる。

真言宗宝蓮院を通り、地蔵前にくると、今でもわずかに松並木が残っており、車の排気ガスを吸った松の木のいたいたしさが目につく。東に入ったところの地蔵堂の中に首切地蔵尊があり、享保8年(1723)という年号が刻み込まれている。

海道新田は、天保年間(1830～44)の家数30軒で、水田が少なく貧村であったため、安政年間(1854～60)小林清次郎によって用水路が開削され、30haにも及ぶ水田が開かれた結果、村は大いに潤ったという。そこで、この小二宮ともいえる小林清次郎の徳を顕彰した碑が街道に面して建っている。わずかに残る松並木をみながら進むと、ゆるやかな登り坂となり、伊沢家景が源頼朝の命を受け、奥州を治めるために向かう途中、愛する子どもをこの地で失ったという伝説をもつ稚児が坂がある高崎製紙工場の前に至る。白沢の宿は、もうすぐそこである。

① 現在の日野町通り

② 妙正寺前の屈曲

③ 豪壮な蔵造り

④ 興 禅 寺

⑤ 八坂神社の神楽

⑥ 地 蔵 尊

⑦ 感恩報徳碑

⑧ 海道新田の松並木

⑨ 稚 児 が 坂

(5) 日 光 街 道

日光は、奈良時代末期、勝道上人が男体山に登頂して以来、信仰と修行の中心として、関東修験の名場として繁栄した。特に、南北朝から室町期にかけて全盛期を形成し、室町期には僧坊500を数え、所領も18万石余りになった。しかし、戦国末期、豊臣秀吉の小田原城攻撃に対して、日光山衆徒は北条方についたため、所領没収の憂き目にあい、一時、衰退してしまった。

近世に入り、元和2年(1616)4月17日、徳川家康が駿府城で没すると、翌年将軍秀忠により、家康の霊廟である東照社(宮)が造営され、江戸幕府の神領として、手厚い保護を受け、日光へ参詣するための道が数多くつくられた。そして、幕府の五街道の一つである日光街道が整備されると、将軍の社参、日光例幣使、諸大名、一般の参詣客でにぎわった。日光街道は、日本橋を起点とし、千住、草加、雀宮、宇都宮、徳次郎、今市などの21宿を経て日光に至る道である。

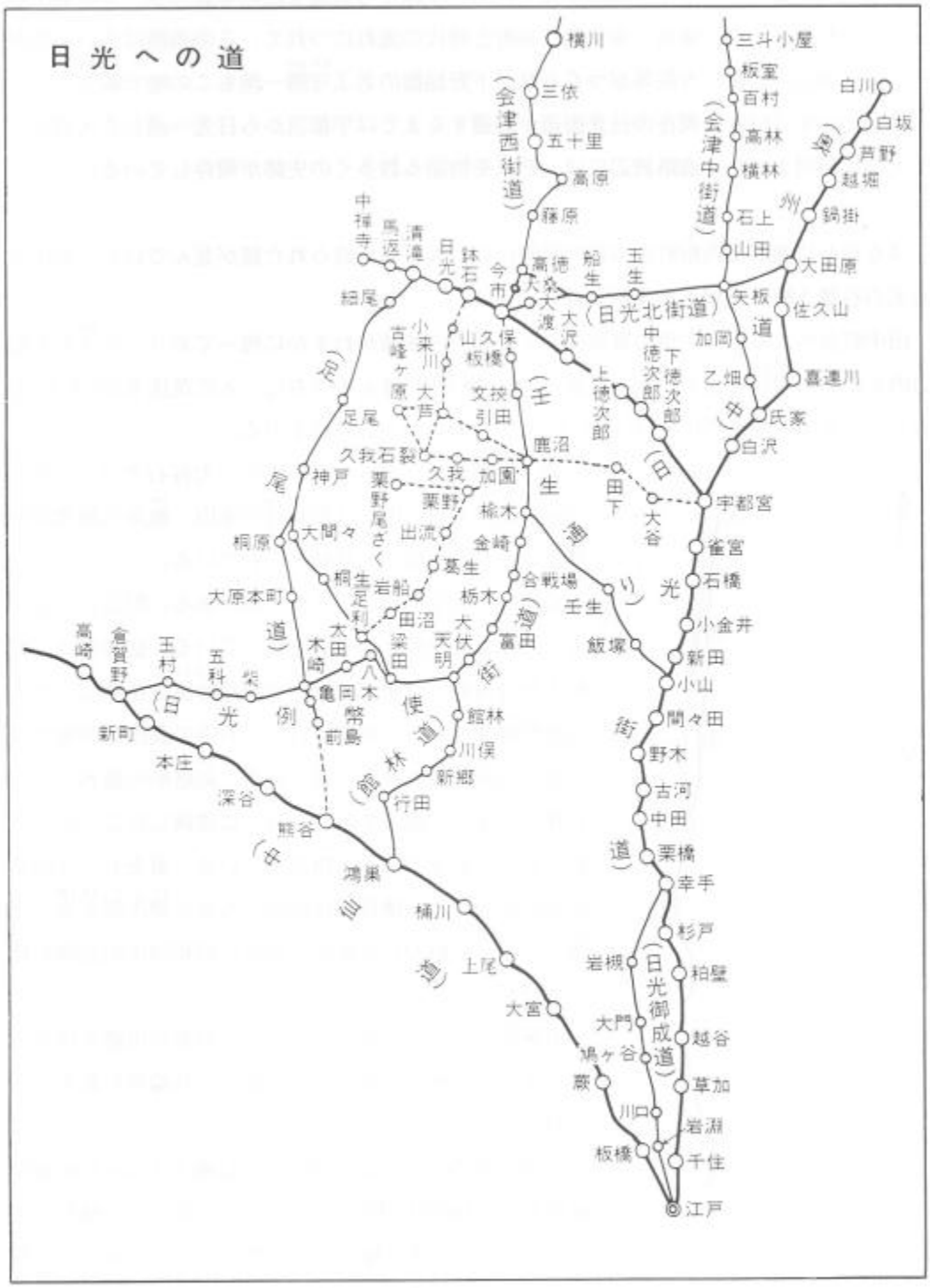
家康の命日に東照宮で行われる大祭に将軍が参詣することが社参であり、江戸時代を通じて19回行われた。二代将軍秀忠の時数人の供奉を連れての簡単な参拝にはじまったが、だんだん華美になり、将軍の富と権力が絶大であることを内外に誇持するための社参になり華美を極め、諸大名を従えた大行列になった。将軍のこのような社参では江戸から日光まで人馬が一続きになったといわれている。しかし、社参に莫大な費用がかかるため、幕府の財政事情が悪くなると、代参が多くなっていった。江戸時代260年の歴史の中で、2代将軍秀忠4回、3代家光10回、4代家綱2回、8代吉宗、10代家治、12代家慶が各1回行っただけである。

日光社参の日程は、4月13日に江戸城を出発し、岩槻・古河に一泊し、15日に宇都宮城に泊り、翌16日に日光に到着し、17日に祭礼を行い、翌18日に帰途に着くのが一般的であった。

天保14年(1843)の将軍最後の社参である家慶のときは、宇都宮藩では将軍の宇都宮宿城のため幕府から金五千両を賜り、御本丸に将軍のための御殿を造っている。

このように日光街道は、幕府と将軍家の聖地を結ぶ重要な道であった。

日光社参の行程
(『日光参詣の道』より)



日光への道（『日光参詣の道』より）

① 旧日光街道

勝道上人によって日光山が開山されて以来、全国から日光を訪れる旅人は、この道を通ったといわれている。鎌倉、南北朝、室町と時代の流れにつれて、この道路は大いに活況を呈し、周辺には館、寺院等がつくられ、下野屈指の名工守勝一派もこの地で鍛刀している。元和元年(1615)に現在の日光街道が開通するまでは宇都宮から日光へ通じる大道として大いに利用された。道路周辺には、それを物語る数多くの史跡が現存している。

ゆるやかに曲がる西根町会の道の両側には、大谷石で造られた蔵が並んでいる。池田さん宅の石蔵3棟は屋根も大谷石で葺いてある。

田中町会へ入ると、中世の城館跡である堀の内城跡がわずかに残っており、小字名も堀の内といい、屋号として、池田富雄氏宅は「堀の内(ほんのうち)」、入江茂氏宅は「大手(おおて)」、入江利左衛門氏宅は「前大手(めあおおで)」といわれている。

道の西側を少し入った田の中に、大谷石でつくられた立派な祠があり、中には源義経の家臣、亀井六郎茂清の墓といわれる石塔が二基納められている。

道を左に入ると伝法寺に続く道がある。町会は、伝法寺にちなんで門前という名を残している。伝法寺は、貞和5年(1349)、清原の同慶寺や塩原妙雲寺を開山した大同妙哲禅師によって開基された。お寺の裏山の中腹には県指定史跡・妙哲禅師の墓がある。卵塔形の墓石には、行状が刻まれ、観応2年(1351)に建碑したことが記されており、お寺の古さを物語っている。道をもどり旧道を北に向かうと、鎌倉時代後期ごろから徳次郎正宗(守勝)が盛んに鍛刀した場所があり、昭和56年記念碑が建立された。

道を進むと、共同墓地があり、この道の由緒を物語るかのように、歴史の重みを刻み込んだ五輪塔が数多くみられる。

上徳次郎の宿と合流する所に、今は廃寺となった安養院跡がある。『続徳川実紀』によると、天保14年(1843)に実施された12代将軍家慶の日光社参では、4月16日、宇都宮城をたち、安養院で小休止している。このことから、

将軍、諸大名等が休息できるくらいに立派なお寺であったことがうかがえる。

そして道は、近世日光街道と合流する。

① 曲った道

② 総大谷石造りの蔵

③ 伝説・亀井六郎の墓

④ 伝法寺山門

⑤ 刀工の鍛冶跡

⑥ 安養院跡

② 日 光 街 道

石橋と宇都宮の境界のところに、追分と言われ旧道の姿を残した所がある。そこから日光街道は現在の街道と平行に走って立場まで続く。石橋との境界を出ると旧道は、民間払い下げにより開墾され畑となっている。しかし、畑をよくみると、街道の跡はくぼ地となってわずかに昔の面影を残している。雨が降るとそのくぼ地は雨水が集まり川のように流れるという。

茂原の陸上自衛隊の東側に立場という小字名が残っており、「立場」という屋号と「馬車屋」という屋号の家が二軒、旧街道をはさんで並んでいる。幕末から明治の初期にかけてこの附近の盛んな様子を示すものとして、茂原の観音堂にかけられた絵馬がある。馬車屋で腰をかけ、休みをとっている人達の姿や、多くの馬の行き交う様子が描かれている。また茂原地内は、天授6年(1380)、下野の両雄、宇都宮基綱と小山義政が壮絶な戦いを行い、基綱ら一族300余騎がことごとく討ち死にしてしまったという歴史が刻み込まれているところである。

新富町の牛塚古墳のある辺りは、当時松並木が続いており宿の入口には一里塚があったようすが「日光道中図絵」に描かれている。旧道の大部分は失われてしまったが、道は雀宮出張所の西側を通り、更に雀宮中央小学校の西側を抜け、現在の4号線と一部合流する。街道の左側には旧本陣といわれている大和田医院や、またその先雀宮駅入口にある、脇本陣・問屋・名主を務めた旧家である芦谷家の門構えが当時の様子を今日に伝えている。

雀宮神社は、平安時代中期、陸奥守になった藤原実方を訪ね、京から奥州に旅立った妻の綾女姫は、雀宮で病死した。その後、夫の実方も陸奥で病死したが、その魂は雀となり妻の死んだ地に飛来した。それ以来、村人は二人を祀り、雀宮大明神と名づけたという伝説をもっている。

街道の西側の青柳氏宅の入口の所に凝灰岩の石室が露出している十里木古墳がある。

左に総合グランドに入る道を越え、陸上自衛隊宇都宮北駐と

① くぼ地となって残る街道

② 旧道に残る地蔵尊

③ 脇本陣の古い玄関

④ 雀宮神社

⑤ 雀宮宿（『日光道中図絵』より）

ん地を西側にみて進むと台新田の神社が右手に見えてくる。このあたりまでの道の両側はかつて松並木であった。上江曽島の一里塚は、宇都宮の宿まで、あと一里の所にある。富士重工を過ぎると不動前に至る。不動尊の前に昭和3年に建てられた道標がある。「右、奥州・日光街道、左、裁判所、正面、東京に至る」となっている。不動前から城下町南端のガード下の所までは、宇都宮市所蔵の「宇都宮御城内外絵図」によると松並木が描かれている。そして、ガード下の所に木戸があったことも記されている。木戸は明六ツ（午前6時）から暮六ツ（午後6時）までが開かれていた。

日光線のガードをくぐると「寛政の3奇人」の1人といわれ、『山陵誌』の著者として有名な蒲生君平を顕彰した碑が建てられている。左手に見える南新町の大ケヤキは、昔、旅人が宇都宮の下に近づいたことを示すものであったのだろう。今は台陽寺のみが残っているが、地蔵寺、大慈院、栄林寺、万松寺、松岩寺など多くの寺院で宇都宮の城下の入口を固めている。このことにより寺院は、城を守る一つの防御線であることをうかがい知ることができる。

台陽寺の入口には、長い間子育て地蔵が祀られている。熱木町には熱木不動尊があり、その昔、仕丁が歌を詠み、その歌が万葉集に載ったことから、歌の橋といわれる町に続く。今でもその町名にちなんだと思われる歌の湯という銭湯があり、ゆっくりと湯につかりたいという興味をそそられる。明神社があるのは大黒町である。道の両側には木賃宿と称する旅人宿が多くあり、夕方になると旅人で賑わい、町並の家々での灯が遅くまでともっていたという。蓬莱観音が祀られていた蓬莱町は、享保7年(1722)に設置された火の見梯子があったことが高橋節子氏所蔵の『宇陽略記』からわかる。道の左側に一向寺があり、国の重要文化財である長楽寺の汗かき阿弥陀が客仏として安置されている。応永12年（1404）宇都宮12代城主藤原満綱の銘があり、世の中に吉凶異変があると、その前兆として身体全体から汗をかくという伝説がある。報恩寺には戊辰戦争の時の官軍である薩摩、

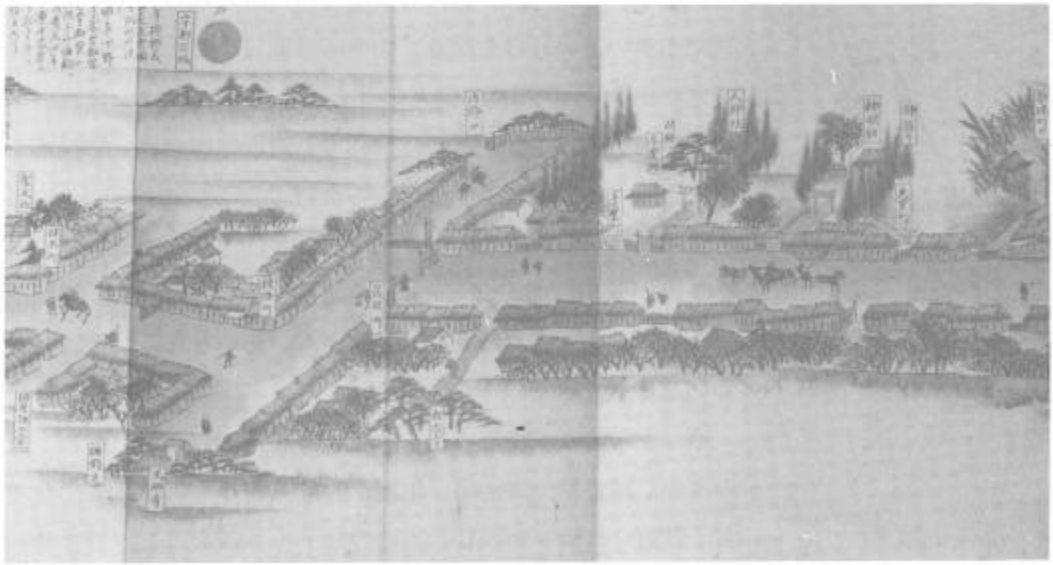
⑥　不動前の不動尊

⑦　蒲生君平勅旌碑

⑧　新町の大ケヤキ

⑨　歌の橋附近

⑩　銅造阿弥陀如来坐像



⑪　蓬莱町のようす（『日光道中図絵』より）

長州、大垣諸藩の戦死者を祀った「戦死烈士之墓」があり手厚く葬られている。道の左側の天満宮（菅原神社）では自治会で500円の絵馬を販売しており、6、7個合格祈願の絵馬がかけられている。拝殿の扁額は、「陸軍大将正三位勲一等功二級男爵鮫嶋重雄謹書」と書かれている。

道の左側に米兵質店を営む古い商家である新村氏宅がある。

蓬莱町の屈曲十字路の右側は、佐野口の木戸があったところであり、左に折れると光琳寺に突き当たり、壬生、栃木、佐野への道となる。酒造屋、油屋、質屋、紺屋、湯屋等のあった茂破町、髪結床、傘屋、穀屋、八百屋等の店の並んだ挽路町を過ぎると、材木町に「不明の御門」があり、この門は「開かずの門」ともいい城内の武家屋敷への入口で、常に閉めきってあった。材木町は、江戸時代の中ごろから女郎屋がみられ、清水屋、江戸屋などの遊郭が15軒ほど並んでおり、他に駕籠屋、荷鞍屋、油屋などもありにぎやかであったといわれる。

街道と突き当たった所が新石町である。ここには、今でいうダンプの重量オーバーを調べる検門所のような役目を果たす貫目改所が設けられ荷物の重量を検査するとともに関所の役目も果たした。貫目改所が日光街道で設けられたのは、千住宿と宇都宮宿だけであった。右に折れると伝馬町となり、日光街道と奥州街道の追い分けとなる。この所は問屋場であるため、伝馬が常に集散し、宇都宮で最もにぎやかな場所であった。各藩の使者が宇都宮藩に来訪した時に面会する対面場があり、郷村から出てきた人々の面会所にも用いられた。

また大名、幕府役人、公家、門跡など、貴人の休泊施設である本陣があり、寛政年間（1789～1801）に旅籠屋16軒、小間物屋4軒、肴屋4軒、造酒屋3軒ほか、いろいろな店が並びにぎわいをみせていた。

道は左に折れ本郷町に入る。道幅4間（約7.3ｍ）あり、道の両側には質屋、穀物屋、紺屋、竹細工商などが並んで、今でも土蔵造りの商家が残り、当時の様子をしのぶことができる。

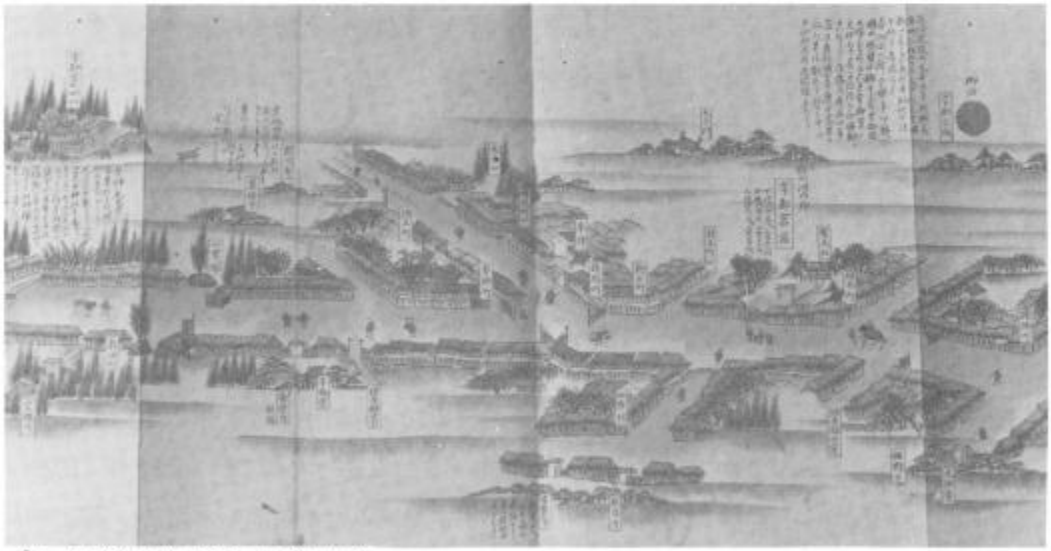
「日光道中図絵」によると、本郷町と新田町の境には、杉が植

⑫　報恩寺の官軍兵士の墓

⑬　開かずの門跡附近

⑭　本陣跡の大ケヤキ

⑮　南から清住町通りを望む



⑯　宇都宮宿（『日光道中図絵』より）

えられた一里塚が記されているが、今は、その跡形もない。宇都宮城下の出口である新田町の宝勝寺では、恵心僧都の作と伝えられる日限地蔵尊があり、23日の縁日には、多くの参詣者でにぎわう。県指定の延命地蔵菩薩をはじめ、延命地蔵菩薩縁日著色絵図額など多くの文化財をもつ延命院、市指定の四天王像のある黄檗宗の真福寺、蒲生君平の墓があり、戊辰戦争時には官軍の宿舎となり、会津藩が来襲して寺に放火し諸堂残らず焼土と化してしまったが、その後再建された桂林寺などのお寺が出口を固めている。

日光街道は、大きな屈曲を過ぎて、松並木の中を進むことになる。現在は、道の両側には、商店が立ち並んでいる。新里道を左にみて、戸祭の変則交差点を過ぎると、車の往来が一段と激しくなる。宝木の地名の由来となった児の手柏の古木がある国立病院内を過ぎ、右手に長岡百穴への入口を越えると、左手の少し入った所に妙吉塚がある。栃木県研修センターの少し手前に、江戸から28里を示す上戸祭の一里塚がある。道の右側の塚は半壊しているが、左側の塚には松が植えられており、昭和58年度に一部修復整備された。釜川が流れる弁天橋を渡ると、道は大きく曲がる。そこは、奥州に落ち延びた義経のもとへ向かう静御前がさしていた桜の杖が枝を繁らせ大木になったという御前桜の伝説をもつ野沢になる。野沢の庄屋中山家を本陣にあてた諸候が小休止した時に支払った正徳5年(1715)の休泊料の資料が中山家に残されている。

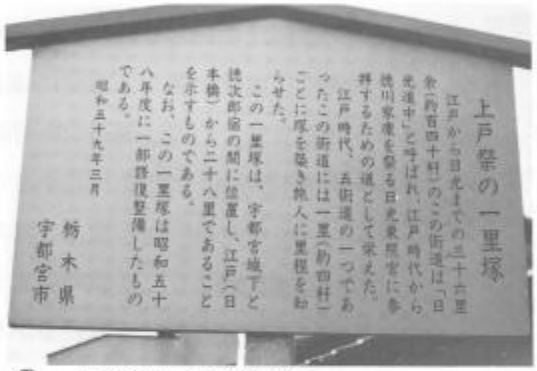
道の左側にある光明寺の前には立場があったという、農業試験場の附近は、弥生時代の標式土器を出土したことで有名な野沢遺跡がある。

道の西側は、寛文10年(1670)宇都宮城主松平忠弘のとき、幕府の命令により未開の原野を開拓してできた高野林、足次、藤岡、二良塚、悟里道などの西原10ヵ村新田830町歩であるが、水利が悪く、作物の収穫もあまりなかったので、文政8年(1825)宇都宮藩が田川からの引水を試みたが失敗したため、嘉永4年(1851)二宮尊徳によって設計され、地元の名主岩崎長左衛門

⑰ 延命院の地蔵縁日絵馬

⑱ 宝勝寺の地蔵縁日

⑲ 児の手柏



⑳ 上戸祭の一里塚説明板

㉑ 御前桜

㉒ 野沢（『日光道中図絵』より）

らの努力によって宝木用水が引かれ、発展した所である。

高谷林の一里塚は、江戸から29里（約116km）あり、昔の面影をよくとどめている。近くの小学3年生の女の子2人が宿題で一生懸命、塚にある説明板を写していた。

東北自動車道のガードをくぐり、山王団地の入り口のところに「大谷道」と書かれた道標がたてられている。かつて、大谷観音へ行く道であったが、今は廃道となり、道標のみが当時の歴史を語っている。富屋小学校を過ぎると道の東側にすべて大谷石で建てられた金田守弘氏宅がある。東側は田川を利用し、深さ4m程の堀跡が残る中世の徳次郎城跡である。徳次郎の地名の由来は、日光に大きな勢力をもっていた久次郎一族が、奈良時代末期に日光二荒山神社から御神体を智賀都神社に勧請して、日光の久次郎氏に対して外久次郎と称したことによるという。道の東側には本陣があり、西側には薬師堂が今でも日光街道に面して建てられている。国道293号線の手前の西側に神社入口道約5丁（約540m）とかかれた小さな道標がある。道の西側へ入ったところに奈良時代に建立された神明宮というお宮がある。神明宮の守り神として2頭のこま犬があり、このこま犬にお願いして軽く持ち上がれば願い事がかなうという。

智賀都神社参道の入り口にあり、日光街道の移り変わりをずっとみつめてきた樹令700年の県指定の老ケヤキは、現代の旅人である国道を往来する車の排気ガスを吸いながらも、神社の古さを誇示するかのように、空高くそびえている。8月1日の晩、村の安全と五穀豊穣を祈願して、上・中・下徳次郎、門前田中、西根の六町会から、目のさめるような彫刻をもって飾りつけられた屋台が社前に勢ぞろいする姿は見事なものである。しかし、今では日光街道の交通事情のため、この祭りは3年に1度になってしまった。

上徳次郎の宿は、三つの宿の中で最も古い。道の西側にあった安養院は、将軍の休憩などに使われたということが「日光道中図絵」の中に「御小休一時」ということからわかるが今は廃寺となってしまった。

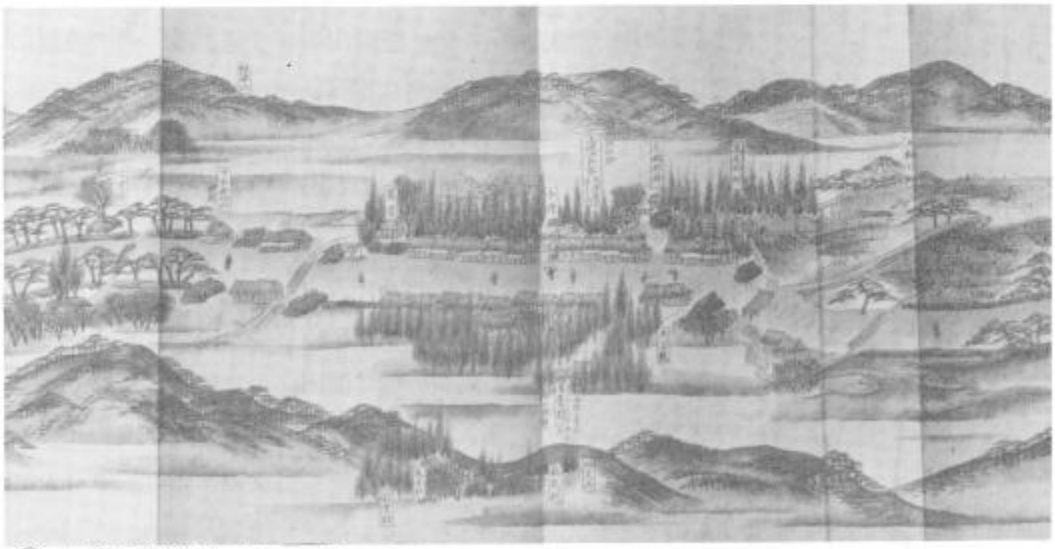
㉓ 高谷林の一里塚

㉔ 大谷道を示す道標

㉕ 田中道を示す道標

㉖ 中徳次郎宿

㉗ 智賀都神社の夏祭り



㉘ 上徳次郎宿（『日光道中図絵』より）

古い商家である石塚家を通りすぎると、石那田の集落が道の右側にみえてくる。塩野室へ通じる道路との分岐点に六本木の一里塚がある。この一里塚は、徳次郎宿と大沢宿の間に位置し、江戸日本橋からちょうど三十里であることを示している。現在の姿は一部修復整備されたものである。

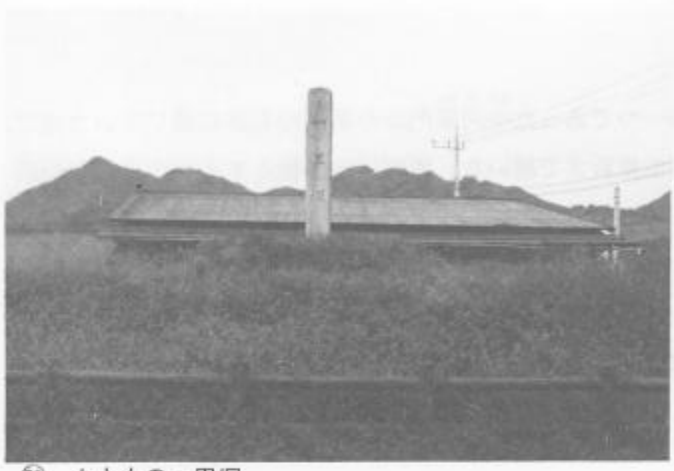
一里塚の西側には、天保11年(1840)につくられ、すべての願いを聞きとどけてくれるといわれる如意輪観音が旅ゆく人の安全を祈るかのように街道を見つめている。天保14年(1843)の12代将軍の最後の日光社参のときは、新しい晴れ姿で輝いていたことであろう。歴史の重みの中で、静かに時の推移をみつめている。

仲内地区に街道と並ぶように、明治時代に田川から水を引き水力発電を行ったところの人口堀がある、昭和初期まで発電を行っていた電気堀跡である。また田川から取水し、徳次郎六郷が使用する二宮尊徳が完成させたという石那田堰がある。

石那田地区には、八坂神社の天王祭のときに出される見事な彫刻がほどこされている屋台がある。いずれも幕末から明治初期のものである。7月14日から24日にかけて行われ、最終日の夕方6時ごろになると各部落から引き出され、石那田を練り歩き、深夜、八坂神社境内に集合する。往時は、日光街道が麻痺してしまうほどであったという。それらの屋台のある、仲内・坊村を過ぎるとまっすぐに街道が続く。

上小池の街道の両側に5m程の円墳が3基ある。道の西側には庚申塔がたち並び、その一角に享保15年(1730)銘のうらない仏がある。人々がこの石仏にぬかずいて願いをかけた後、台座のところにある、3個の丸いいずれかの石を、手にして軽く感じれば願いが叶えられるという伝承がある。今は風化して顔立ちははっきりしないが、全身からやさしさがあふれてくる。

上小池の新渡神社の街道をはさんだ西側に直径約3m、高さ約1.8mの一里塚がある。東側の塚は開田により破壊されてその痕跡もみとめられない。旅人は、この一里塚の近くにある神社の境内で、疲れをいやしたのであろう。そして街道はより一歩日光に近づくのである。

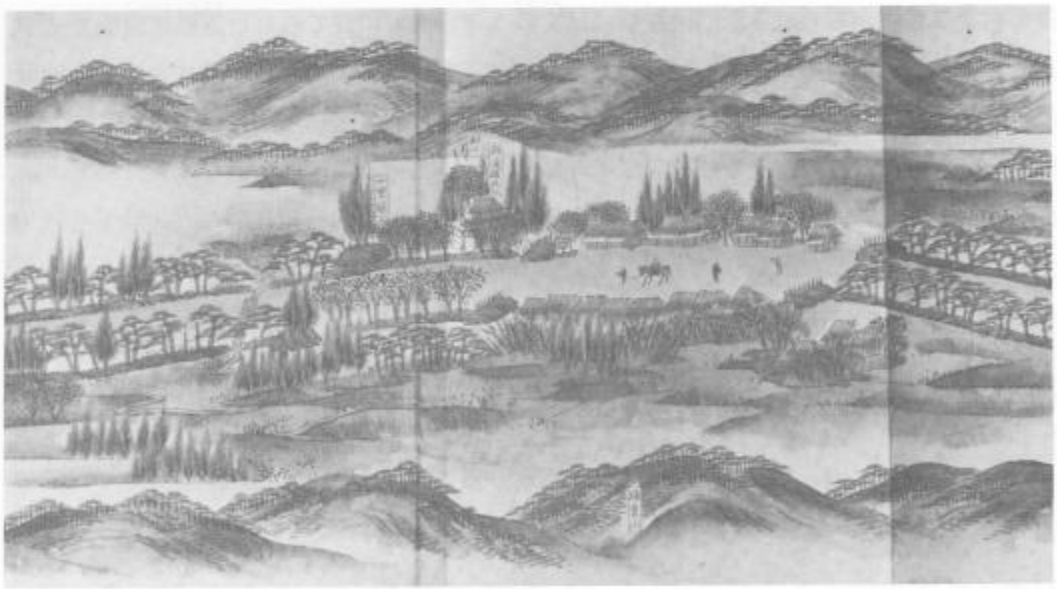


㉙ 六本木の一里塚

㉚ 十九夜様

㉛ 石那田の屋台

㉜ うらない仏



㉝ 上小池（『日光道中図絵』より）

(4) 脇　道

① 石　井　道

江戸時代の宇都宮城の出入口の一つであった中河原門から東部の石井に通じていた道で、石井は、宇都宮藩の領分として明治維新まで続いた。鬼怒川を主軸とする小川や用水が潤沢な水量を存分に活用できる肥よくな耕地であったところから、昔からの穀倉地帯であった。

また石井河岸は鬼怒川通り七河岸の一つで、宇都宮藩領の江戸廻米の積出し河岸であり、下流の下桑島河岸まで1里、江戸までの里程は45里であった。元禄年間(1688～1704)には船数41を数え、石井道は、河岸への道でもあった。鐺山を通り笠間に至る道でもあるため水戸北街道とも呼ばれた。

中河原交番の南側の細い道を入ったところに小さな橋がかかっており、江戸時代中河原御門があった所である。猿ヶ橋稲荷が川向こうに赤い鳥居をみせている。区画整理、洗橋の架け替え、護岸工事などにより当時の面影はほとんど失われたが、田川から猿ヶ橋を経て南大通りに通じる通路にわずかに当時の面影が残されている。猿ヶ橋は土橋であったが、昭和34年コンクリート橋に架け替えられた。東北本線石井街道ガード附近に湾曲した当時の道がわずかに残っており、その南側には、肥料店が古いたたずまいをみせている。車の往来の激しい国道4号線を越えると、宇都宮大学がみえてくる。大学の東側の郵便局を南に折れる。道の北側には、宇大の敷地の北西隅にあったが大正10年に移された子育地蔵または峰地蔵と呼ばれるお地蔵さんが、お堂の中にどっしりと座っている。曲がった道を東に向かって進むと、両側には民家が建ち並んでいるが、所々に畑や雑木林がみられる。道の右手に古墳がみられる。道の左側には文政3年(1820)に建てられた道橋修覆供養碑があり、更に河川橋梁の大工事を行ったことが、久部の吉沢久夫氏宅に所蔵されている記録によってわかる。坂を下ると、新4国道が走っており、目の前に水田地帯がひらける。鬼怒川を越えて、筑波の山並みが紺色深くみえる。新4国道を越えると道の北側に石井城跡がある。現在は水田となり、古城内、蔵の内、馬場先、堀の内、相曽口などの地名を残すのみである。更に進むと造り酒屋がある。下川岸に入る所に大きなケヤキの木があり、旧

道の跡が残っており、初午の赤飯とシモツカレがわらのツトッコに入れられ、お稲荷さんにあがっていた。また下川岸の鬼怒川からもってきたという、邪鬼をふみつけた青面金剛やお地蔵さん　如意輪観音がみられる。そして医王寺が道の南側にある。入口のところには、お地蔵さんがあり、お寺の本堂は東の鬼怒川に向かって建てられている。鬼怒川を運行する船と船人の安全のため、秘仏の薬師如来は一心に暗い厨子の中で祈っている。下川岸の河原で帆かけ船の通るのをみていた人たちは、今は少なくなってしまった。

① 猿ヶ橋稲荷

② 猿ヶ橋から旧道を望む

③ 石井ガードレール下の旧道

④ 分岐点の峰地蔵

⑤　道橋修覆供養碑

⑥　豪壮な構えの農家

⑦　新４号国道附近

⑧　造り酒屋の蔵

⑨　並ぶ石仏

⑩　石井の河岸

② 道 場 宿 道

江戸時代の宇都宮城から、東部の道場宿へ通じていた。道場宿は、旧水戸街道の宿場として栄え、特に江戸時代には鬼怒川の渡船場として交通上極めて重要な位置にあり、また河岸問屋もあり相当に繁栄したところである。河岸とは、陸付けをしてきた荷物を船に積み、船に積んできた荷物を陸へ揚げる河港のことであり、街道における宿場と同様に交通運輸の要所である。道場宿河岸は鬼怒川通り七河岸の一つで、元禄時代(1688～1704)廻船数39あり、烏山道を陸送された黒羽藩や烏山藩の廻米の積出しが行われた。

慶長3年(1598)蒲生氏が会津若松から宇都宮に転封になったとき、日野の商人が一緒に移り住んだ日野町通りを過ぎ、大町通りに入ると道の左側に市指定の「おしどり塚」がある。

押切橋を渡ると石蔵のある古い商家である笹屋がある。八日市場通りの突きあたりの屈曲を越えると、林松寺の北側に出る。東北新幹線の開通により、「あかずの踏み切り」は取りはずされ、今は道場宿道は寸断されている。

国道4号線を越えると、道の北側に竹林がうっそうと茂り、石蔵が旧家であることを語ってくれる海賀さんの家がある。新柳田街道を横切り、「水戸道下」という小字名が残っている所を通り、産業道路を越えると、道は旧道の面影を増してくる。立派な長屋門づくりの家をみて、たつ街道を越えると、北原の集落のはずれの川の土手に、馬頭観音がある。

町は街道に面して立派な門構えの家が建ち並んでおり、その中に造り酒屋がある。鬼怒の清らかな水と地元の米を用い、作られる酒は日本の名酒の一つに数えられている。

鬼怒の堤防に向かって進むとかやぶき屋根の農家が点在してみられる。「大イチョウのある所の薬師堂には、10何年か前までは、銅でつくられたお釈迦様があり盛大に信仰されていたが、いつのまにか持ち去られてしまった」と道で逢った婦人は、残念がっていた。鬼怒の堤防に上がると、対岸に道場宿がみえる。かつては、木の橋がかかっていたというが、今は、上流に近代的な柳田大橋がかかっており、夜中でも、照明が橋を照らしている。

鬼怒川を越えると、田の中に神社の鳥居があり、お堂の中にお地蔵さんが祀られている。

道場宿には、かつて河岸で栄えた様子を残す旧家が何軒か残っており、当時をしのばせ

てくれる。道場宿のゆるやかな坂をのぼると北側に鉄仏のある大乗寺がある。古い大谷石でつくられた高台にある神社は、八坂神社である。南に折れ旧道を行くと、石幢六地蔵や日本の歴史を大きく揺り動かす事件のあった年号である万延元年(1860)が刻まれている馬頭観音がある。坂道をさらに登ると、道場宿を一望に見渡せる場所になる。そこに「享保5庚子、3月」と刻まれたお地蔵さんが村人の平和な暮らしと遠く鬼怒川を走る船の安全を祈るかのように、静かに座っている。

清原中央小学校の北側を通り、清原工業団地入口の交差点に、安永8年(1779)に建立された道標がある、脇の細い道が烏山から江戸に送られる廻米が運ばれた道、つまり烏山に至る烏山道である。

① 八日市場附近

② 林 松 寺

③ 馬頭観音

④ 立派な門構えの農家

⑤ 鬼怒川岸への道

⑥ 道場宿の屋並

⑦ 高台の地蔵尊

⑧ 刈沼の道標

③ 真 岡 道

江戸時代の宇都宮城から東部の真岡に通じていた道である。真岡は鎌倉初期の文治年間(1185～90)に宇都宮氏の家臣、清原高親が居城して芳賀氏と称し、附近一帯を統治し、宇都宮と密接に往来した道でもあった。また鬼怒川の河岸に続く道としても重要な道であった。道路は拡張され、古い面影を残しているところは少なくなった。鬼怒大橋の完成に伴い、真岡道としての使命は失われつつある。

東北本線ガードをくぐり抜けると道はゆるやかに左右に曲がり、国道4号バイパスを横断し、左斜めに入ると、吉沢三郎氏所有の板張り倉がわずかに当時の面影を残している。平松本町地内には十九夜塔がお堂の中に並んでいる。

平松本町のカーブした坂を上ると、10数年前までは山林であったが現在は、道の両側に人家、商店が並んでいる。三豊製作所を過ぎると右に折れる道がある。成願寺へ参詣するために利用された成願寺道である。

卸売団地の入口から宇都宮東高等学校の間はくぼ地になっており、学校ができた約20年前のころまでは雑木林が続いており、このあたりは追いはぎが出て、旅人を困らせたという言い伝えが残されている。

新4号バイパスを越えると、道の右側やや離れたところに前方後円墳、円墳と縄文遺跡を含む柿の木遺跡がある。

新宿の道の北側に旅芸人や富山の薬売りなどの行商人を泊めた「かどや旅館」が20数年前まであったが時の流れの中で姿を消してしまった。かどや旅館の隣には、鬼怒の清流を使用した造り酒屋があった。

① 蛇行する道

たつ街道との分岐点のところに、お地蔵さんが、ほこりにまみれても、必死で人々の安全を願って立ち続けている。

畑中の村はずれにあるお地蔵さんに別れを告げると、鬼怒川にかかる木橋の喜楽橋である。鬼怒川が洪水になるとよく流された橋である。橋を渡ると真岡の石法寺に入る。

② 道沿いに見える板倉

③ 平松本町の地蔵尊

④ 鬼怒川にかかる喜楽橋

④ 上 三 川 道－1

鎌倉時代初期、宇都宮五代城主頼綱の子頼業が居城した宇都宮城下の南部上三川に通じる道で、風雲急を告げる室町期から戦国期にかけては、上三川の地においても激戦が繰り広げられたため、宇都宮と上三川の間の軍勢往来は、激しいものがあり、軍事的性格の強い道路であったと思われる。

江戸時代から昭和初期ごろまでは、宇都宮から上三川間の交通路として重要視され、庶民の生活路としての道であった。江戸時代の末ごろ、この街道の西方約5kmの所に、日光街道がこの道に平行に走っており、大名行列等が行われた表の道であったのに対し、歴史の表面に出ない脱藩浪士たちの歩いた道であったと語られている。

旭中学校の西側の一方通行の道を不動前に向かって登り、東に折れると旧奥州街道の道筋と一部重複する。簗瀬橋の上に乗ると左手に大ケヤキがみえ、大きな瓦の屋根が人家の中にひときわ大きくみえる。

建久3年(1192)源頼朝が鎌倉に幕府を開いた年に創建された天台宗の光徳寺である。寺の手前を南に進むと、東北本線の踏み切りになる。左手は、中央卸売市場、右手遠方の丘陵は、江戸時代、御山屋敷があったといわれるところである。

国道を越えてしばらく行くと、市の終末処理場の近くの運動公

① 大城内への道

園の東側の道が改修されているが、これが上三川道である。南に向かって進むと東側に煙突の煙が高く登っている市の清掃工場があり、西側は、ことぶき会館である。下屋板の道に面して建つ立派な長屋門のある家を過ぎ、所々に雑木林を残す田や畑の中を進むと、中島の桜田古墳が回りを削られて、いたいたしい姿を残している。道の西側の森は東谷神社であり、目の前は、笹塚、双子塚古墳をはじめ、大きな古墳が密集している古代の文化の花開いた東谷地区であり、上三川に続く。

② 畑の中の道

③ お離子発祥の中島神社

④ 森の中の東谷神社

④ 上 三 川 道－2

瑞穂野地区、下桑島町畑中から上三川町旧本郷村に通じる本道は、上三川の多功城と、刑部城、桑島城、石井城、平出城に通じる街道の一部で、中世において人馬ともに往来の激しかった道で、今も屈曲した古道が農道として使用されている。

下桑島の畑中で真岡道と分かれ、官修墳墓を道の東側にみて、田の中の農道を進むと前田内の火の見櫓が見えてくる。文政6年(1823)に建立された前田内の観音堂が町内の約10年間にわたる貯蓄で修理されたことは地区の人々の信仰のあつさを物語っている。また道の東側には六地蔵をはじめ、正徳4年(1714)の如意輪観音が道に面して建っている。

宇都宮頼綱の子孫が居城した中世の館跡である刑部城が、土塁および堀跡をわずかに残している。館の西側の墓地の小さなお堂に、文化5年(1808)の銘をもつ鰐口がかけられている。堀の内の田中公民館の前を通り、車一台がやっと通れるような農道を進むと、集落の入口にかやぶき屋根の薬師堂が古い姿を残して建てられており、東木代町の集落がみえる。集落のうしろには、紺色をした筑波の山並みがくっきりと姿をみせている。

お堂の前には、「江戸源門高橋石屋勘兵衛」の銘のある宝篋印塔や、正徳5年の11月19日と12月19日に作られた如意輪観音が仲良く並んでいる。

道は東木代町の集落の中を進み、消防小屋の前を通り、雪をかぶった日光連山をながめながら進むと、上三川に入る。

① 前田内の石仏群

② 前田内の観音堂

③ 刑部城跡

④ 村はずれの薬師堂

⑤ 並ぶ如意輪観音

⑥ 集落の道

⑤ 鹿　沼　道－1

「宇都宮御城内外絵図」によると、鹿沼街道は「鹿沼道」と書かれており、日光街道の材木町から西に続く道である。中世の鹿沼は、宇都宮氏と対立し宇都宮氏に鹿沼に攻め入られ町中を焼かれるということもあり、この道は中世の戦乱期の道でもあった。また近世においては、日光に最も近接する町で、例幣使街道の宿場町である鹿沼と宇都宮を結ぶ道としてまた商品の交易の道として大いに利用された。

日光街道の材木町を西に折れ、材木横町と呼ばれた道を入ると、今から約800年前に創建された名刹である観専寺に出る。観専寺は寺宝も多く"宇都宮の文化財の宝庫"といわれ、池大雅、谷文晁、高久靄厓の絵画をはじめとして、幕末の多くの資料があり、指定の文化財は62件を数える。旧道の面影を残す街並みの中を西に進み新川を渡り、更に行くと栃木街道との交差点の所に肥料店を営む古い商家がある。

鶴田橋を渡ると、羽黒山のふもとに、「七つの子」「青い眼の人形」「赤い靴」などの歌を作った野口雨情の旧居があり、道の北側には「あの町　この町　日が暮れる　日が暮れる　今きたこの道　帰りゃんせ　帰りゃんせ」と書かれた雨情の歌碑がある。どこからともなく、風の音に乗って童謡が響いてくるような雰囲気をもつところである。羽黒山に登ると遠く男体山、高原山の山並みがみえ、東をみれば鬼怒川のかなたに雨情のふるさとの山、筑波山がくっきりとうかんでくる。

出羽三山の羽黒山の名称を付した市内唯一の神社である羽黒神社では、古くから梵天を奉納する祭りが行われており、毎年11月23日には祭り囃子を朝早くから響かせている。神社の境内では、朝から屋台が並び、ゆずや菓子が売られる。本殿では、商売繁昌の種子銭としてお金を借り、翌年には倍にして返すということも行われている。

ゆるやかな坂を下ると、城山から大谷石を鶴田駅まで運んだかつてのトロ道が交差点の北側に一直線にみえる。

姿川を越え、長坂の旧道を通り、高速道路を越えると、道の南側に縄文時代の遺跡があり、さらに行くと、筒花高塚群があり、約10mほどの塚が3基南北に並んでいる。鹿沼は目の前である。

① 観専寺前の通り

② 観専寺山門

③ 観専寺の道標

④ 雨情歌碑　通りゃんせ

⑤ 羽黒山の梵天

⑥ トロ道跡

⑤ 鹿　沼　道－2

江戸時代の宇都宮城の出入口の一つであった佐野道と六道のえん魔堂まで同じ道を通り鹿沼、楡木、粟野方面に通じていた道で、鹿沼道、粟野道と呼ばれたが、宇都宮に向かっては、宇都宮道、宮道と呼ばれた。上欠町の一本仏から鹿沼道と粟野道に分岐しており、「鹿沼道上」、「鹿沼道下」の小字名を残している。

天保14年(1843)の宇都宮古図によるとえん魔堂からの出口は、鶴田道となっており、えん魔堂の南側の道を西に向かう。富士見小学校を右に見て、坂をくだると、道の左側に大正時代に建てられた如意輪観音があり、右に折れると旧道となる。田の中に高龍神社の大きなケヤキがみえてくる。境内には、文久4年(1864)の男體山の石塔がある。羽黒下を南北に走る道を越えると右側に豪荘な石屋根の黒崎家の長屋門が南に面して建っている。鶴田沼への入口を右手に見てそば屋さんの所のバイパスを越えると、車一台がやっと通れる細い農道となる。道に面して古いかやぶき屋根がどっしりと歴史の重みを伝えている。砥上の公民館の北側竹やぶの道を入るとやはりあぜ道のような農道が続く。道の南側に「下街道」という小字名が残っている。右側には日光連山がくっきりと浮かんでおり、左側には市の第二霊園を建設している丘陵が所々山肌を表わしている。楡木街道を越えた所から一部廃道となり、姿川を渡り、日光線の踏み切りの手前を右に折れ、宝林寺、星の宮神社に出る。高台にある神社の二匹のこま犬は、下を通る村人を守るかのように見下ろしている。コツン、コツンという音が北風に乗って響いてくる。村のお年寄りたちが集まって毎日のように、ゲートボールを行っている音である。

日光線を越え、坂を登ると一本仏に出る。「右、鹿沼街道、左、粟野街道」の分岐になり、最近建てられた粟野街道改良工事記念碑がある。右に折れると、古賀志の山並みが濃い青色を空に突き出しており、道の両側に「鹿沼道上」・「鹿沼道下」の小字名が残っている。路傍には、まさに朽ち落ちんとしている馬頭観音と如意輪観音がひっそりとしている。バイパスを越えると旧道の面影をよく残した道になり、日光線が走っている。線路を越えると鹿沼に入る。

一本仏を左に折れると粟野道で、最近の改修で道は良くなり、坂をくだり楡木街道を越えると下深津（しもふかす）、粟野へと続く。

① 如意輪観音が立つ旧道入口

② 石屋根の長屋門

③ カヤ葺き屋根の農家

④ 星宮神社のこま犬

⑤ 一本仏の分岐点

⑥ 並ぶ石仏

⑦ 山ぎわの道

⑤ 鹿　沼　道－3

宇都宮から鹿沼に通じる旧道で、鎌倉時代から明治中ごろまでは、人馬ともども往来し、現在も生活道として地域の人々に使われている道である。この道の由緒を物語るかのように、沿道には、寺院、神社、城跡、石碑、古代の遺跡、古い民家などが多くみられる。

大谷道、国立療養所前の道を左に折れ民家の中を進み高速道路を越えると、宇都宮城から多気城まで行き来する人はすべて馬や籠から降りて寺の前だけ歩いたという言い伝えのある、能満寺である。

能満寺のすぐ西の鎧川と姿川の間には、土塁が30m 程残っている中城がある。中城は多気城の支城で、南の北原城と北の多気城の中間に位置していたのでこの名がついたと言われている。中城の前の道を更に西に行くと大きく右に折れるY 字路になる。そこには、長い風雪のため文字の消えてしまった石塔が立っている。

姿川を渡り、戸室山に向かうと、石切り場が見えてくる。戸室山の鳥居の前に出る。戸室山は、奥州平定をした源頼義が宇都宮初代城主の宗円に命じて神社を設立したという伝説をもつ由緒ある神社である。鳥居をくぐり大谷石の長い階段を登ると、二匹のこま犬が向かえてくれる。更に登ると神楽殿があり、かつては神楽が演じられ、多くの見物客でに

① 神社前の分岐点

② 能　満　寺

ぎわったという。この戸室山には、弘法大師が一晩に百穴を掘ったという話も残されている。

戸室山をまくようにして、日当たりの良い南斜面の道を進むと、古代の遺跡が密集している所に出る。城山中学校の南の道を通り、天王原(てんのうはら)に向かうこの高台にもやはり、古代遺跡が数多く見られる。右手には、多気の山が、どっしりとそびえている。

③ 中 城 跡

④ 大谷石の石塔

⑤ 石 切 場

⑥ 戸室山神社の石段

⑦ 林の中の道

⑥ 佐　野　道

佐野道は、茂登町の東端を佐野口として、旧西原佐野街道町から六道に至り南に進み、壬生・栃木を経て佐野に至る交易の街道であるが、普通、佐野道というと佐野口から西原佐野街道そして六道に至る間を指し、六道から南は一般に栃木街道といっている。現在は、桜通り交差点から県立中央公園前の広い道が栃木街道になっていて、旧栃木街道は滝谷町交差点で断ちきられてしまっている。

城下町特有の屈曲のある、蓬莱町交差点の佐野口を西に進み光琳寺前を鍵型に折れ突きあたりを左に曲がると、中村肥料店をはじめ古い商家が並んでいる。道の西側にえん魔堂があり、弘法大師がこの地を訪れた時、ここに草庵を結んで、丈８寸の行基作のえん魔像を安置したという伝説がある。六道の辻というのは、かつて六つの辻に分かれていたことによるという。この地は、戊辰の役における激戦地であり、会津そのほか幕府軍の戦死者を埋葬した「戊辰役戦死墓」の碑が建てられている。『宇陽略記』によると、六道からは大平山のかなたに富士山がくっきりと浮かんで描かれている。

新川に沿って滝谷町交差点までいくと道はきれてしまう。滝尾神社は一般に滝の権現といわれ、昔は老樹がうっそうと繁る境内に、「滝の泉」と称する清水が湧出し、宇都宮七水の一つとして、旅人の憩の場所になっていた。

交差点を南にさがり、西川田の大谷石の塀の中に旧家が続く。その中に型挽蛇腹という珍らしい化粧を施した白壁の土蔵がある荒川さんの家も旧家の一つである。

姿川第一小学校の校庭には、市指定のフジの花があり、５月には見事な香りを漂わせている。

幕田の旧道に入ると三叉路になっており、東に折れると安産稲荷への道となる。

戊辰の役４月21・22日の両日の安塚合戦における幕府兵大鳥軍の戦没者を合祀したもので碑面に

「戦士死十七名霊」と書かれている。

また近くにある樋口城は鎌倉時代に宇都宮頼綱の一族である樋口主計頭が居城し、天正2年(1574)に武田勝頼の軍勢が下野に攻め入り、宇都宮氏と対立したとき、樋口主計頭の後えいは、先陣をきって奮戦したがついに帰ることはなかった。それ以後、城は歴史の流れの中で再び生き返ることはなかった。現在、増山民江氏他の屋敷地となっており、「御城」・「中城」などの地名を残している。

また寛政6年(1794)に幕田河岸が開設された跡がみられる。姿川を越えると壬生町に入る。

① 光 琳 寺

② 趣のある商家

③ 六道の辻

④ えん魔堂の大ケヤキ

⑤ 滝の権現

⑥ 長 屋 門

⑦ 姿川第一小学校のフジ

⑧ 野仏が立つ分岐点

⑨ 戊辰戦争戦没者の碑

⑩ 古書にみえる六道からの景観（『宇陽略記』より）

⑦ 駒　生　道

宇都宮氏が駒(馬)を飼育したことが、町名の由来となり、江戸の天保年間(1830～44)には25軒の家があり、この駒生と宇都宮の桂林寺を結ぶ道を駒生道といい、大谷方面の人は宮道と呼んだ。

古き日の駒生道は、ほとんどが道幅狭い山道で、人家も稀な寂しい道筋であった。

桂林寺前の交差点を西に向かい、城下町特有の屈曲した小幡町の道筋を通り、桜通りを越え、遠歓寺境内に室町時代末期の良訓和尚の方形の高塚がある。それが地名の由来となった和尚塚を過ぎ、宇都宮女子商業高等学校の東側を通り、カワチ薬品の北側の細い道を更に西に進む。所々に点在する雑木林が、昔の姿をしのばせてくれる。

宅地造成の進む宝木小学校東側を通り、国立宇都宮療養所北側を過ぎ、山崎街道を越え、東北自動車道をくぐると、駒生の外和田に深い堀を巡らせたところがあり、所有者の細谷邦夫氏の先祖は宇都宮藩の御殿医をしていたという。更に進むと、子育て地蔵尊が祀られている瓦作の十字路に至る。

① 遠　歓　寺

② 土塁と林の中の館跡

③ 分岐点の子育地蔵

⑧ 文　挟　道

大谷と今市の例幣使街道の走る文挟を結ぶ道は、文挟道と呼ばれ、信仰の山である多気山、古賀志山の山すそを通る道で、今市の例幣使街道を通る旅人が大谷に向かった道でもある。このことを物語るものの一つとして、文挟道と例幣使街道の分岐点には「右、鹿沼、左、大谷」と書かれた道標がある。

国道293号線を右手にみて少し行くと、多気山への登山口が右手にある。更に行くとやはり右手に森林公園入口があり、左手は木喰上人が薬師如来など15体の仏像を刻んだ栃窪への道である。赤川の少し手前は道の分岐になっており、道標を兼ねた馬頭観音が建っている。川を渡ると右手に岩肌を鋭く表わした古賀志山が迫ってくる。坂を登りつめたところに薬師堂があり、石でつくられた薬壺をもった薬師如来が安置されている。更に進むと日枝神社があり、石の鳥居をくぐり、大谷石の階段を登ると厳島神社の鳥居と同じ形をした四脚の控柱のついた両部鳥居がある。県立盲学校入口を左手にみるあたりになると古賀志の山は一段と大きく、岩肌をはっきりとさせてくる。久保の集落の中に薬師堂があり、お堂の前には馬頭観音、如意輪観音、地蔵尊、馬力神、宝篋印塔などの多くの石仏が並び、村人の信仰の厚さを物語っている。お堂の中の薬師如来は厨子の中に入り姿をみせてはくれない。

道の右側に立派な門構えの家があり、裏山は木でうっそうとしている。高久謄厓の画幅のある北條キヨさん宅である。

城山西小学校に入る道は、標高538 mの古賀志山への登山の道でもある。御岳山からの展望はよく、日光、那須連山の雄荘な山岳美がみられ、古賀志山には、大日窟、滝権現などの修験の遺跡がみられ、山の歴史の古さを物語っている。城山西小学校の校庭には、かつて古賀志山中に建てられていた、安政4年(1857)建碑の芭蕉の句碑「語られぬ　湯殿にぬらす　袂かな」がある。また校庭の中央にある桜の木は、市指定の文化財になっており、樹令約400年の老木であり、「孝子桜」と呼ばれている。更に文挟に向かって進むと、道の左側に道標がやや倒れかかって立っている。「右、日光道　左、八幡台」と書かれている。古賀志の山すそをまくように進むと今市市との境になる。

① 馬頭観音

② 日枝神社

③ 薬師堂と石仏

④ 城山西小学校のシダレザクラ

⑤ 芭蕉句碑

⑨ 新　里　道

桂林寺前を通り日光街道と同じ道を1km程行くと、上戸祭の変則交差点の少し手前に斜め左に入る道がある。これが新里道である。この道は、宇都宮、今市大沢を結ぶ道で、鞍掛峠が境をなす。そしてその境には大きな道祖尊がある。またこの街道は、国本の交通上の脊髄をなすとともに日光街道の間道としても利用された。

日光街道を左折し、少し進むと、国道119号線の日光街道と交差する。更に進み宝木用水(新川)沿いの宇都宮中央女子高等学校の西側の道を北上し、高速道路を越えると道の左側に勝善神がある。更に進むと国本中央小学校前の交差点に出る。岩本観音方面と岩原に向かう道と三方向に分かれる。細谷、悟里道、仁良塚と進んできた道の両側の田は、長い間、水の便が悪く作物の収穫がままならなかったが、幕末に二宮尊徳によって設計され、地元の名主岩崎長左衛門らの努力によって、宝木用水が引かれ発展した所である。

国本中学校を越えると、字名が大堀という所になる。大堀には、中世の城館跡で深く堀の回った家が2軒ある。

少し行くと、道の左側の共同墓地の所に庚申塚が数基みられる。国道293号線と合わさり更に進むと落内集落があり、カーブを曲がるところに文政3年(1820)の如意輪観音が道に面し

① 仁良塚の分岐点

て建っている。更に進み姿川に沿ってゆるやかな道を登っていくと、橋くぐり地蔵堂の前に出る。はしかにかかった者に堂の前の橋をくぐらせると、はしかが治るということが伝えられている。

栗谷沢(くりやさわ)ダムを越え、曲がりくねった道を登っていくと鞍掛峠に出る。そこから先は今市になる。その峠に天保(てんぽう)元年(1830)の道祖尊がある。旅人の目印として、そして、村境としてこの道祖尊は多くの人々の往来をみつめてきた。

② 路傍の石仏

③ 橋潜り地蔵堂

④ 峠の道祖尊

⑩ 大　網　道

「倭名類聚鈔」に、古代の下野の郡名や地名がでているが、そのなかに河内郡10郷名として刑部（おさかべ）、大績（おおみ）、池辺（いけのべ）等があり、篠井、大網一帯を指した「大績」がいつか「大網」になったとされている。池辺と呼ばれた宇都宮とともに、河内郡北方の代表地として栄えた由緒ある所である。この道はそのころ誕生したといわれている。東方山麓の道として、南は田原、豊郷方面から、北は篠井、今市を経て日光へ通じる重要な道路であったと考えられる。現在、大網及び篠井地内は道路改修工事により拡張整備され昔の面影が失われつつあるが、上横倉地内は新たに新道が出来、田川べりにわずかに昔の名残をとどめている部分がみられる。

羽黒新道を入り、縄文時代の遺跡である岡平遺跡と新田義盛館跡をすぎ、大網に向かって山すその道を少し行くと右側に新田氏の守り神といわれる比沙門神社がある。長い階段を登る途中の右側に3基の庚申塔があり、文政3年(1820)と安政7年(1860)に建てられた。

更に登ると、大きな岩があり、雨露をさけることができるように突き出している。昔、宿のない旅人はこの岩陰で一夜の宿をとったのかもしれない。

石の階段をもどり田川に沿って更に進むと大網の集落がみえてくる。大網は、高館山、黒戸山のふところに抱かれた歴史ある所だ。高靈神社の境内には、鳥居の役目を果たし神社の歴史を物語る太い2本のスギがあったが、何年か前、落雷により1本失ってしまった。道に向かい、ふっくらとおだやかな面立ちをした如意輪観音と、今にも朽ちはてようとしているが村人の安全を必死で祈る姿の馬頭観音がある。

下篠井に入るとかやぶき屋根の農家が裏に山をかかえどっしりと建っているのがみられる。道が大きく右に曲がる所に薬師堂がある。古い五輪塔がお堂の片すみに寄せられて、ひっそりと時を過している。江戸時代の末ごろに書かれたと伝えられる篠井の古地図には、この薬師堂が描かれている。そして篠井道と合流する。

① 此沙門神社

② 庚申供養塔

③ 大網入口にある道祖神

④ 馬頭観音

⑤ カヤ葺き屋根の農家

⑥ 薬 師 堂

⑦ 薬師堂附近の古地図

⑪ 篠　井　道

近世以前の日光街道は、古い商家である石塚屋より入り、市指定天然記念物のコウヤマキのあるところを左折して、下小池を通り日光に向かったという説もある。篠井道は、幕末の動乱期に入ると、水戸藩の尊王攘夷派の浪士たちが起こした天狗党の乱の時に、今市の小林から篠井を通り新里へと抜けた道であったといわれている。

車の往来の激しい日光街道を古い商家である石塚屋を右折し曲がりくねった道を少し行くと田川の橋に出る。橋を渡りカーブを曲がり終えたところに『倭名類聚鈔』において、河内十郷の一つに数えられている大網に続く道と合流する。

今はほとんど歩かれなくなった山際の道を行くと、市指定天然記念物のコウヤマキがある。しばらく行くと下篠井の畑の中に風化した石塔が建っている。この塔は、日光東照宮の金看板を盗んだ疑いをかけられ、無実の罪で殺されたといわれる茅勘助の供養塔である。

真言宗の寺である東海寺の入口に供養塔が集まっている所をまくようにして旧道の跡がみられる。この道の由緒を物語るように、正徳2年(1712)の年号をもつ庚申塔がみられる。東海寺は、寺伝によると「室町時代の末ごろ、水戸城主佐竹侯が時の金山奉行に命じ篠井金山を開発させたとき堂宇を建立して寺号を水戸の東海村に因み東海寺を号した」という。

榛名山(ガンガラ山)は昭和30年代の中ごろまで採掘がおこなわれており、抗夫たちによって歌われていた市指定無形文化財の「篠井の金掘唄」が今日まで歌い継がれている。また「徳次郎」の地名の起源を明らかにする篠井神祠がある。

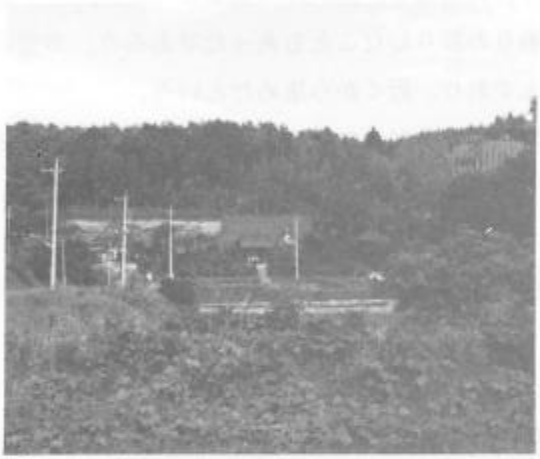
道をもどり、東海寺入口から北に進むと、道の右側に石の祠に入った子育地蔵があり、この地蔵が動くと村では火事などの異変が起きるという。

そしてゆるやかな道を登りつめて行くと塩野室に至る。

① コウヤマキ

② 茅勘助の供養塔

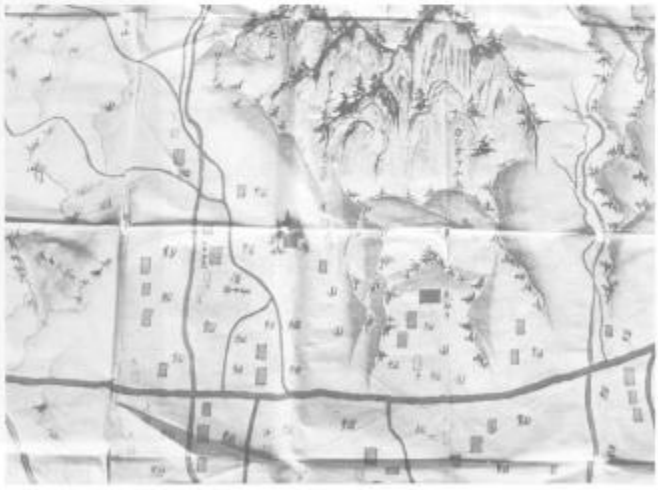
③ 正徳２年の庚申塔



④ 東 海 寺

⑤ 篠井の全掘唄

⑥ 子育地蔵



⑦ 古地図にみられる上篠井附近

⑫ 羽　黒　道－1

徳次郎地内を東西に横断する幹線で、現在は氏家、鹿沼線として立派な近代整備の直線的な街道になっているが以前は屈曲した道であった。日光街道を進んできて、徳次郎から羽黒方面へ行く人はほとんどこの道を利用した。

西根の町内をぬけ、多くの提灯にゆれる徳次郎西根の屋台が智賀都神社に向かう時に使う屋台道と呼ばれている道を通り、宝木用水を渡り、薬師堂へと向かう。お堂は日光街道を入口としている。多くの旅人の行きかう日光街道で、徳次郎に宿をとった旅人が早立ちの仕度を終え、朝もやの中、旅の安全を祈りお参りしたこともあったであろう。お堂の近くには、すばらしい出来ばえの石仏が並んでおり、近くから集めたという。

文化元年(1804)につくられた道標を兼ねた馬頭観音は、台座を加えて2.3ｍほどあり悪をにらむ激怒した姿をしている。中央の台座の正面に一頭の馬が陽刻され、右側面には、「右　山道、左　氏家・白沢道」とある。元は徳次郎城跡の麓にあったといわれる。また高さ約2ｍの宝塔造りの六面幢六地蔵は享保16年(1731)につくられ二百数十年の風霜に耐え形もよく残っている。

お堂の北側を通り、日光街道を越えると、右手にこんもりした林がある。中世城館跡の徳次郎城である。徳次郎城は、宇都宮城の北方の守りとして宇都宮第22代城主国綱の家臣徳次郎昌信の居城といわれており、慶長2年(1597)宇都宮家滅亡とともに廃城になったと伝えられている。現在の遺構は、内堀、外堀とそれに伴う土塁が現存している。

道を左におれた右側の山林の中に古墳が4基みられる。左側には、大ケヤキがあり、坂を下ると羽黒に向かう新道と出合う。

① 宝木用水

② 薬 師 堂

③ 石 仏 群

④ 薬師堂前の道標

⑤ 徳次郎城の堀跡

⑥ 御城田古墳

⑫ 羽 黒 道－2

日光街道と奥州街道の間に挟まれ、古来、宇都宮から北へ通じる主要街道である。この道の一部は、源義家公が奥州の安部氏平定のために向かった道とか、治承4年(1180)源頼朝挙兵の報を受けた弟義経が兄の待つ鎌倉へ駆け参じた道とかいう伝説をもっている。また上河内村の北部にある康平年間(1058～1064)に創建されたといわれる羽黒山神社が近世、宇都宮城主奥平家をはじめとして代々の城主の崇敬があつかったこととともに修験の道場として、また近郷近在の人々が集まる梵天祭の場として多くの人々が参詣した道として今日まで至っている。

マスキンの前の北へ行く道は赤門通りと呼ばれている。安永7年(1778)、枝源五郎によって慈光寺に高さ約15mの仁王門が建てられた。この門が赤門と呼ばれた。

塙田交番東の蛇行した道を左に八幡山を見ながら北に進むと、山本町に出る。山本町から岩曽町にかけては道路の大幅な改修が行われて昔の面影が失われてしまった。山本には、江戸時代の作で寄木造りの山本観音と呼ばれる金箔を塗った聖観世音菩薩立像があり、古くから近郷の人々の信仰を集めている。

岩曽から旧道を通り堀米に入る。堀米は江戸時代、瓦谷、関沢とともに二荒山神社の御神領の一つであり、神社の祭礼に、田楽舞を奉納したり、流鏑馬に参画するなど種々の神事に携わっている。また堀米は、埋め墓と参り墓の両方をもつ両墓制の習俗をもっている。

安政年間(1854～1858)、この地で国学者梅園春男は私塾を開き、子弟の教育に当たり多くの人材を世に送った。

旧道を通り、豊郷中央小学校の西側を通る。ここは明治年間に村役場がおかれ、村の中心地となり、公的機関が集中していた。

関堀(旧関沢)では、源義家公にちなむ伝説をもつ獅子舞が毎年8月のお盆に奉納されている。

1月5日に、岩本地内の道を通ると、どこからともなく太鼓の音が響いてくる。平野神社で、瓦谷の神楽保存会の人々によって太々神楽が奉納されているのである。

岩本町の北山霊園には、市指定史跡の北山古墳群がある。北山古墳群とは、宮下古墳、雷電山古墳、権現山古墳の3基の横穴式石室をもち、6世紀末から7世紀代に築かれたと推定される前方後円墳と、その周辺に点在する小円墳の総称である。古代のこの地の支配者である埋葬者はこの丘陵の高台から自分の治めた村を見下ろし、人々の平和と豊かな暮らしを祈っていたことであろう。

北山霊園墓地のすそを通る旧道を更に進むと、道の左側の中腹に赤い鳥居がみえる。階段を登ると岩穴の中に神社が祀られている。雨の神様を祀る高龍神社である。

旧道の出口は小さな墓地になっている。岩本を出て、田原に入ると、水車がゆっくりと回っている。

① 慈 光 寺

③ 堀米の田楽舞

② 聖観世音菩薩立像

④　関堀の獅子舞

⑤　瓦谷の神楽

⑥　宮下古墳全景

⑦　権現山古墳石室

⑧　石窟の中の神社

⑨　水　　車

⑬ 砂 田 街 道

慶長年間(1596～1615)に村のできたころは、土地がやせていて、作物の収穫に乏しかったので村民が一致協力して、砂まじりの良い土を用い、土地の改良を行ったことが村名の由来といわれている砂田は、天保年間(1830～1843)の家数は5軒であった。戊辰戦争の時、官軍の彦根藩兵が駐とんし、宇都宮城を攻撃する幕府軍の土方歳三に攻められたところである。

真岡道を南に折れ、フタバ食品を過ぎると「十九夜」の屋号をもつ旧家の篠崎家があり、更に進むと道の西側にお堂があり、路傍に馬頭観音が建てられている。横川中学校を過ぎ、砂田の集落に入ると、道の西側に承暦元年(1077)の創建といわれる稲荷神社がある。更に道に面して、如意輪観音などの3体の石仏が並んでいる。石蔵のある家構えをみて進むと刑部への道の分岐となる。

① 馬頭観音

② 並ぶ石仏

③ 石蔵の意匠

⑭ 長 岡 ・ 川 俣 道

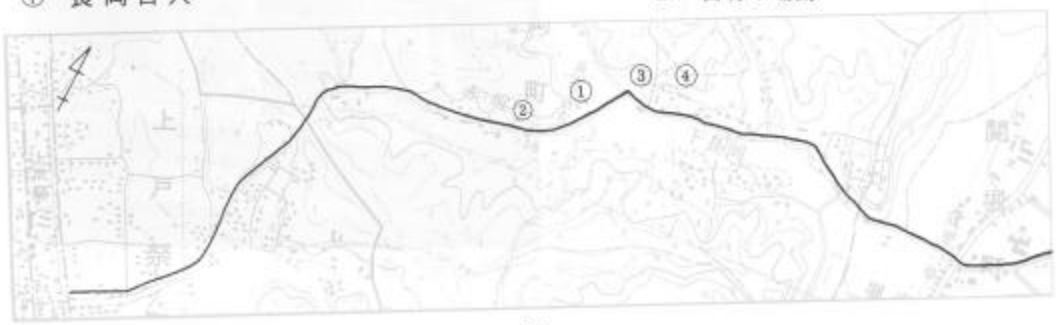
江戸時代の五街道である日光街道と奥州街道を結ぶ道で、きらびやかな日光東照宮参詣の道とみちのくの奥州を結ぶ道である長岡・川俣道は、県指定史跡である長岡百穴古墳や多くの古墳、そして伝説を秘めた道であるとともに人々の生活の道として古来から重要な道であった。

日光街道を右折し、江戸時代初めごろ庄屋を務めたといわれている石塚家の前を通り、東に進むと道の北側に縄文時代のやじりのでる畑がある。釜川の橋の近くに、馬頭観音がある。橋を渡り、赤坂に向かうと、道の東側の雑木林の中に県指定の大塚古墳がある。坂をくだると長岡の集落が山に囲まれたなかに息づいている。

西の方に目をやると凝灰岩が岩肌を表わし、ポッカリと口を開いた穴が52個ある。長岡百穴古墳である。百穴は丘陵の斜面に蜂の巣のように掘られた古代人の墓である。各穴の中には、室町時代の作と伝えられる観音像が刻まれている。また百穴にまつわる伝説としては弘法大師一夜の作とか、豊城入彦命の東征の折、この地で大激戦をしてその死者を葬った穴とかいろいろ伝えられている。また百穴の前に「長岡道路開削記念碑」が立っている。これには「宇都宮北一里のこの地は日光東街道と羽黒街道とを結ぶ要地でありながら悪路にて不便。道路整備計画が立てられ、明治39年4月24日工事始め……」とある。

① 長岡百穴

② 石切り場跡



近くには長岡石を切った石切り場の跡が生々しく残されている。百穴の東側に聖徳太子を祀った太子堂がある。

どっしりとした長屋門のある所を左に折れると上長岡への道である。右に折れると北側に正和4年(1315)銘の板碑がある高靈神社がある。神社の裏山一帯は瓦塚古墳群となっており、40基近くの古墳が群在している。田川の橋を渡り、豊郷中央小学校の前の道を川俣方面に向かう。この道は、源義経が通った道ともいわれている。川俣の火の見の近くのお堂に行基作と伝えられている延命地蔵尊があり、縁日には念仏が行われている。高靈神社を過ぎ、御用川を渡ると、海道町を通る白沢街道（旧奥州街道）である。

③ 長 屋 門

④ 瓦塚古墳群のある丘陵

⑤ 念 仏 講

⑥ 御 用 川

⑮ 平　出　道

平出は、鬼怒川左岸の肥よくな土地で、平出三千石と言われた宇都宮藩の穀倉地帯であり古くから開けた所である。また平出町にある雷電神社の祭礼には、多くの人々の参拝をみた。平出道は、宇都宮とこの穀倉地帯や神社とを結ぶ道であったが、現在は、工業団地造成と都市化の波の中で、街道の姿は急激に変化しようとしている。

宇都宮農業高等学校の東約200 m の所を北に折れると、街道沿いの大木のもとに馬頭観音が2基あり、半分土に埋まった方には、天保9年(1838)と書かれている。国道を渡り、県営住宅の中を通り、更に進み、旧道の出口の所を左に折れると、工業団地で道は寸断されている。平出の雷電神社は、大杉、樫の古木の中に鎮座し、毎年、7月の第4日曜日には、梵天が奉納され近郷近在の人でにぎわう。新4号国道の手前にお地蔵さんがある。立派な門構えの家をみながら進むと、たつ街道に出る。

① 馬頭観音

② 雷電神社の梵天

③ 地　蔵　尊

⑯ 市 兵 衛 道

昔、平出に市兵衛という豪農がいて、その人の名をとって市兵衛道と呼ばれていた。道は細く、荷車の通れるくらいであり、途中は山林であった。平出工業団地の造成などにより、新道ができ、街道としての機能は消失してしまったが、所々に昔の街道の名残をとどめている。

宇農高の北側に稲荷神社があり、文字の読めなくなった馬頭観音が分岐点のところにある。右に向かうと、大きな枯木の根元に道標を兼ねた馬頭観音があり、大谷石のため風化が激しく、文字の読解は困難であるが、「右、柳田をへて道場宿　左、板戸」と書いてあったと土地の古老はいう。いずれの道も鬼怒川の河岸へ続く道であった。

国道を越え、中央自動車教習所の南側の雑木林がところどころ残る道を東に向かうと、工業団地に突き当たり、道は寸断されている。鬼怒中学校の北側をくだり、たつ街道を越える。

① 稲 荷 神 社

② 道標のある分岐点

⑰ た つ 街 道

真岡道と接するたつ街道は、下桑島町の谷川から石井を越え岡本へと続く鬼怒川に沿って南北に走る街道である。街道に沿って宇都宮氏の支城である桑島・石井・平出の各城が並び、宇都宮東部の軍事的色彩の強い道であるとともに、金剛定寺、医王寺、広琳寺という名刹を結ぶ信仰の道でもある。

下桑島町の谷川を北に向かうたつ街道の東側に高龍神社があり、境内には二十三夜塔や石仏がたくさん並んでいる。瑞穂野北小学校を越えると道の東側に宇都宮氏の支城として鎌倉時代に築城された桑島城があり、「中城」の地名や「政門」・「西の門」・「東の門」などの小字名が残されている。

街道沿いにある薬師堂を巡るために白装束に身を固めた巡礼姿の村人を20年位前までは見かけたと鮎沢明さんは語ってくれた。

小原高尾神社の境内に全長約35m、高さ約2.5mの前方後円墳があり、後円部の頂上に神社が鎮座している。

鎌倉幕府7代将軍惟康親王の信仰を受けたり、明徳4年(1403)朝廷から「金剛定寺」の寺号を賜ったと伝えられる金剛定寺が道の西側の田の中に見えてくる。境内には市指定の樹令400年のカヤの木や江戸時代の元文元年(1736)に作られ、当時の工芸美術の粋を集めた、市指定の宝篋印塔がある。

下川岸に近づくと、打上げ花火の菊が開いたような形をしたケヤキが歩くたびに大きくなってくる。ケヤキの木のもとには、この街道の人々の往来をみつめてきた石仏がたくさん並んでいる。

下川岸の道を西に入ると、鎌倉時代、武人であるとともに歌人として、多くの勅撰和歌集に歌をのせた宇都宮頼綱（実信房蓮生）の子孫が治めた石井城があり、「古城内」・「蔵の内」などの地名を残している。慶長2年(1597)、宇都宮氏とともに滅亡した。

東に入ると、秘仏で普段には見ることのできない、南北朝から室町初期の作と推定される木造薬師如来坐像がある医王寺が

① 薬 師 堂

② 桑島城跡

③ 金剛定寺

④ 宝篋印塔

⑤ 石井城跡

⑥ 木造薬師如来坐像

ある。

道を更に北に向かうと、新道の石井街道と出合う。鬼怒橋のたもとには、宇都宮氏が代々崇敬した高靈神社がある。

石井の郵便局を営む福島氏宅の立派な家構えが街道に面してある。

西に向かうと、道の北側に石仏が並んでいる。道を北に折れ、水田地帯の中をまっすぐに進み、新柳田街道を越えると、道場宿道と交差する。平出の小原の派出所の所では、平出道と合わさり、郵便局のところでは、市兵衛道と合流する。

道の西側に、真言宗の広琳寺があり、毎年4月になると、市指定のしだれ桜がところ狭しと、咲きほこる。また文珠堂の屋根には、市指定の大日如来坐像が東を向いて座っており、お堂の中には、智恵を授けてくれる文珠菩薩がある。広琳寺の過去帳は、元禄年間(1688～1704)から多くの人が住み、平出地区が古くから開けていたことを物語ってくれる。広琳寺の西には、50m四方の館跡と考えられる平出城があり、現在では土塁の一部を残すだけとなってしまったが、「御城」・「東門」などの地名を残している。宇都宮の家臣、鈴木・平出・平石の諸氏が存城したと伝承されている。

街道の西側の広町の路傍には、雨にぬれた青面金剛がひっそりとたたずんでおり、広町から関口を通り板戸の河岸へ抜ける古い道をみつめてきた。鵜内を過ぎると岡本に入る。

⑦　塀をめぐらした旧家

⑧ 高霊神社

⑨ 石仏群

⑩ 広琳寺のシダレザクラ

⑪ 過去帳

⑫ 平出城跡

⑬ 苔むした石仏

(5) 城　道

『栃木県の中世城館』(県教委発刊)によると栃木県下では410の城館跡の存在が確認されている。そのうち宇都宮市では、31の城館跡が確認されているが、それらの多くは、平山城か館形式のもので、中世下野の雄宇都宮氏の没落とともに滅んでいった。城館を中心として、多くの武将や民衆が往来した道、その城の入口に続く道は、農道や山道などの生活道となってはいるが「城道」と呼ばれ、姿を変えながらも今日まで生き続けている。

①　根古屋城への道

東に姿川、西に武子川が流れ、その間を南北に延び、舌状台地の南端に立地している根古屋城は、康暦元年(1379)、小山義政の支城として築かれたと伝えられており、元亀の初めごろ、城主小山政長は、小山秀綱とともに北条氏政と戦い、敗れたために元亀4年(1573)根古田犬飼能登守康吉が城主となったが、天正14年(1586)宇都宮勢に亡ぼされ、廃城となったといわれている。

深い空堀と土塁など室町期城郭の遺構を良くとどめている。この城から丘陵尾根伝いに鹿沼に通じる古道があり、上欠と根古屋地区を結ぶ道として利用されていた。古道の由緒を物語るものとして、古道に沿って経塚が3基並んでおり、その中の一基を発掘したところ、観音開きの塗金の跡がみられる享禄2年(1529)の経筒が出土した。

② 経　筒

① 空からみた根古屋城跡附近

② 飛山城への道

飛山城は、鎌倉時代末期の永仁年間(1293～99)に芳賀高俊が主家の宇都宮城の支城として築城したと伝えられ、中世の動乱期において、芳賀氏（清原氏）と益子氏は常に宇都宮氏の両翼として活躍し、その戦功は『太平記』に記載されるほど著しいものがあった。しかし、慶長2年(1597)、豊臣秀吉の命による宇都宮氏の滅亡とともに廃城となり、300年にわたる歴史を閉じた。

城は、自然の地形を利用した平山城で、東西約330m、南北約450mにも及ぶものであり、深い空堀と土塁を二重にめぐらし、通路と思われる「土橋」や「物見櫓」跡がみられ、廃城約400年を経た今日まで往時の遺構をとどめている。

「史跡飛山城跡」と書かれた標柱のある東側の畑の中に続く一本の農道は、城道と呼ばれ、芳賀氏の菩提寺である同慶寺の南端の切り通しの中を結ぶ道である。同慶寺は一般の寺院とは異なり、内城・外城からなり、内城だけでも広さは20町歩(約20ha)に及んでいる。そして二重の堀がめぐり、飛山城の支城としての機能を果たしていたと推定されている。

② 堀底の道

① 空からみた飛山城跡

(6) 信仰の道

① 大谷観音への道

〝名を聞くも　恵み大谷の観世音　みちびき給え　知るも　知らぬも〟の御詠歌のある、坂東19番の観音霊場で宇都宮を代表する古刹である大谷寺は、国指定の重要文化財である十体の磨崖仏が岩壁面に彫られており、平安初期から鎌倉時代にかけての作といわれている。また観音堂正面の千手観音は大谷寺の本尊で、離れ離れになった父子が観音様の導きで再会できたという話や、観音様の化身が急な坂道のところを参拝する人の手を引いたというものなど、数多くの話が伝えられている。「宇都宮御城内外絵図」によると、大運寺の西から道は出ており、『宇陽略記』の丹堂薬師についての説明の中に、「安養寺ノ北ニ有是ヨリ大谷観世音ヘノ道有」と書かれている。大谷観音、多気の不動尊、そして、大谷石運搬などの道として、多くの人々の往来をみた道であった。

裁判所前の大運寺の西に、宇都宮城を築いた時にその守護神として祀った八薬師の一つである丹堂薬師があり、新川を越えると古い商家や酒造屋があり、今でも市の中心に町の中で酒造りを行っている。桜通りを越え、六軒　中丸を過ぎると、高龍神社の前で道は二つに分かれている。右側を進み、高速道路をくぐり、兜川を渡ると、道の南側は一直線に走る、旧トロ道である。

城山出張所の少し手前の右側に、坂本の集落に入る道がある。道の入口のところに赤いよだれ掛けをした古いお地蔵さんが、車のほこりにまみれながらも、村人の安全と道ゆく子どもの交通安全を祈るかのようにたっている。

道を進むと右側にお堂があり、その中にもお地蔵さんが祀られている。

集落のつきあたるところの道を左折すると、すぐ急な山道となる。今はほとんど通る人もなく荒れており、ときおり、山菜採りの人が歩くぐらいだと言われている。この坂が手引き坂と言われる。この屋根道を下るとそこは大谷寺である。

① 丹堂薬師堂

② 宝木古墳

③ 地蔵尊

④ 手引き坂

⑤ 石切り場跡

⑥ 大谷千手観音

② 多気不動尊への道

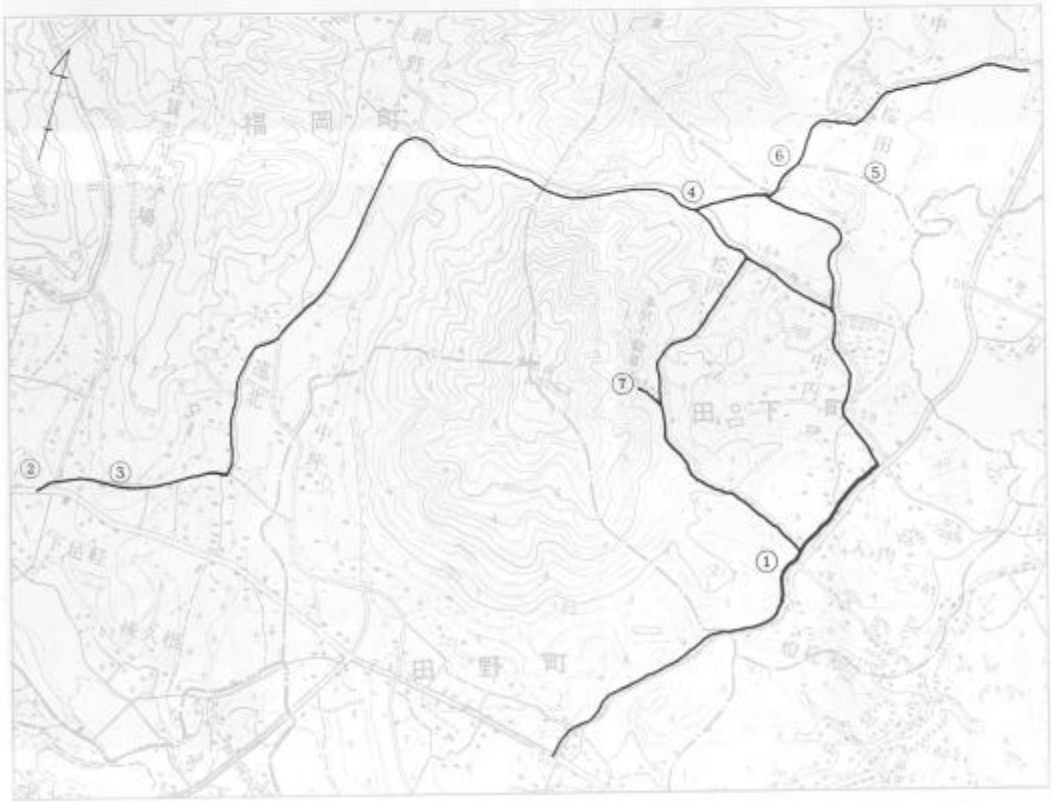
宇都宮の北西10kmのところに、どっしりと腰をおろしたような姿の多気山がある。多気の中腹にある持宝院に建武2年(1335) 8月1日、宇都宮2代城主藤原宗綱公から、不動明王が奉納されたといわれている。不動明王は、真言密教の主尊である大日如来の使者として多くの信仰を集めている仏である。それ以後、歴代城主の厚い信仰心のもとに多くの参詣者を集め今日に至っている。

1　国道293号線方面から

国道293号線を新里に向かうと、多気入口の少し手前のカーブの所に大谷寺からの道と立派な石の燈ろうと石の鳥居のある多気旧道の合流地点になる。鳥居をくぐると道はすでに廃道になっており、わずかに昔の面影をとどめている。

2　福岡方面から

福岡町を通る文挟道に沿って一体の馬頭観音がこだかく盛られた塚の上に安置されており、「右　宇都宮・大谷、左　徳二良」と台座に彫られている。馬頭観音の北側が一部廃道になっている。東に向かってゆるやかな坂を登りつめると、目の前に多気山の偉容が飛び込んでくる。参詣者にとってほっと一息をつく所かもしれない。坂を下り、古賀志の山す



そをまくように遠北の集落から細野の集落に向かい大きく右に折れ、多気山と雲雀鳥屋の谷あいの道を越えると、新里桜田方面からの道と合流し松沢の集落を抜けて不動尊に至る。そこには、庚申塔をはじめとして数多くの石塔が立ち並んでいる。

3　新里桜田方面から

国道293号線から桜田に入る道は、昭和の初めごろまでは盛んに使われた道であった。荷馬車一台がやっと通れるような道を、桜田の人たちは馬の背に荷をつけて鹿沼の宿に物を運んだという。桜田の村はずれの共同墓地が分岐点になっており、馬頭観音がひっそりと建っており、「右　かぬま、左　大や　たぎ山」と台座にかかれている。鹿沼への道は今はほとんど使われておらず、やぶとなり荒れている。多気山と雲雀鳥屋の谷あいを越え、細野を通り鹿沼の宿に向かうのには一番近かったという。

共同墓地の前を更に南に行くと視界がひらけ、多気の山が飛び込んでくる場所に出る。道の突きあたりを左に折れ、多気山、大谷寺へと続いている。右に行くと今はほとんど用いられていない廃道であるが、細野から来た庚申塔のある道と合流する。

① 多気山旧登山道

② 道標を兼ねた馬頭観音

③　多気山を望む道

④　石仏が並ぶ分岐点

⑤　木かげの道祖神

⑥　道標上に座す馬頭観音

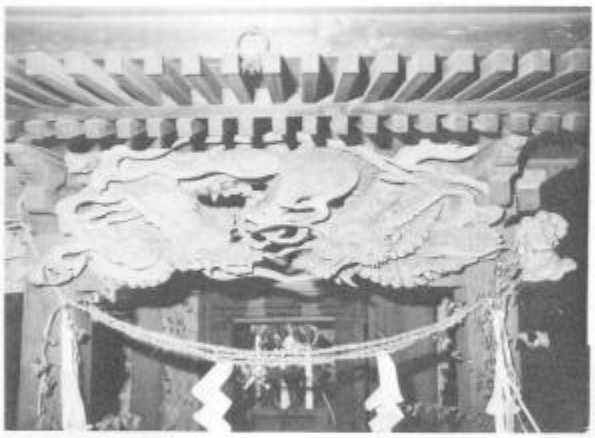
⑦　秘仏多気不動明王

③　安産稲荷への道

栃木街道幕田の道路改修により、廃道になった所、兵庫塚へ左折するイチゴの集荷場の所の辻に嘉永２年(1849)建立の「安産稲荷道」なる長方形の石の道標がある。

中世のなかごろ、宇都宮８代城主の宇都宮貞綱の北の方が難産の折に、貞綱を初め家臣の者が必死に祈願したところ、霊験あらたかであり速やかに男児が出産したと伝えられており、安産の神として庶民の信仰を高め、「安産稲荷」として親しまれてきた。

「ひがし　是より八丁」とあるように、道標のある所から、東に向かって道が細くなり、畑が続く。そして住宅が今にもこの畑を飲み込んでしまうかのように近づいてきている。針ヶ谷、古山へ続く道と合流し、左折すると道の左側に長い参道の神社がみえてくる。境内には、太々神楽を奉納する神楽殿や道祖神があり、本殿の前には石でつくられた２匹の狐が建てられている。



① 安産稲荷本殿

② 道　　標

④　御岳神社への道

徳次郎、下横倉、金井方面を結ぶ道路であり、豊郷方面にも通じる重要な道である。特に天保5年(1834)、信濃国木曽御岳山から御分霊を下横倉山頂に勧請して建立し、各方面から多くの参拝者でにぎわった。

日光街道の宇都宮第一病院の東側の道を入り、高速道路のガードをくぐると、嘉永5年(1852)に、二宮尊徳によって桧や杉の植樹された上金井の二宮林がある。道を南に折れ、T字路を東に向かうと、田川の清流が静かに流れている。正面の山の中には、戦国時代に築かれた、中世宇都宮領の北の防備の拠点である平山城の下横倉城があり、小字名に「家老内」城の南に居住する横倉氏の子孫といわれる磯野家の屋号「入城」がある。田川を渡り、北に進むと御岳神社の入口がある。整備された道を登り進むと、頂上の平なところに出る。篠井・富屋・国本方面が一望でき、山と川との調和が整い絶景である。御祭神は猿田彦命、大巳貴命、国常立命、小彦名命、金山彦命等である。

①　横倉城の下横倉城

②　磯野家の長屋門

③　横倉山頂の御岳神社

⑤ 成願寺への道

奈良時代の天平神護元年（765）に勝道上人42才の時に創立されたと伝えられている寺で、源頼朝の寵愛を受けた安達藤九郎が死んだといわれる由緒ある寺である。また七堂伽藍を配置した寺ではあったが、文政6年(1823)火災によりことごとく焼失してしまった。この成願寺へ至る道が成願寺道である。

真岡道の恵光寺前を右折すると、かつては雑木林であったところに、新しい住宅が次々と建てられている。新4国道の造成により旧道の一部が廃道となっている。国道を渡ると雑木林のトンネルとなり、道の西側の林の中に、明治製菓宇都宮食菌試験場があり、しいたけの栽培をしている。瑞穂台小学校を西側にみて、更に進むと、成願寺の大イチョウが大きく空に突き出しており、お寺の古さを物語っている。お寺へお参りする人たちも、この大イチョウを目印として歩いたのであろう。

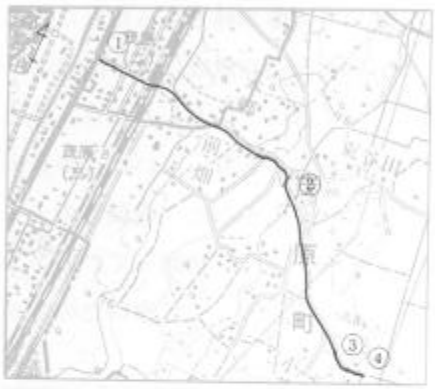
① 真岡道との分岐

② 林の中の道

③ 成 願 寺

⑥　茂原観音への道

宇都宮市の南部茂原町にある、茂原観音堂には、南北朝から室町初期の作といわれる木造聖観世音菩薩立像が祀られており、60年に１度公開される秘仏である。この観音様が多くの参詣者からあつく信仰されたことは、江戸時代から、現代までの絵馬が数多く奉納されていることからもうかがい知ることができる。この日光街道から茂原観音までの道を観音道と呼んでいる。



日光街道沿いの茂原町に「茂原正観世音道」と書かれた標柱が街道の東側に建っている。

道を東に向かい、日光街道の旧道跡地のくぼ地を右にみて進み、東北本線の地下道を越え、前畑を過ぎ、茂原の愛宕塚古墳を北にみて進むと、丘陵の降り口に観音堂がある。お堂の代表者は、道の南の寺内重雄氏である。

① 道　標

② 分岐点の石仏群

③ 茂原観音堂

④ 茂原観音

あ　と　が　き

市教育委員会では、ふるさと宇都宮の歴史と文化財に対する理解のために、文化財シリーズとして身近な生活の中に題材を求め、発刊を重ねてまいりました。今回シリーズ第8号として「宇都宮の古道」を関係者の御指導・御協力によりまして、発刊できますことを厚くお礼申し上げます。

本書の古道に関しては、既に多くの先生方により調査研究がなされ、その成果が、報告書や書籍として発表されているところであります。この成果をふまえ、文化財調査員の活動の一環として、改めて地域に残る古道を調査し直し、整理し、ここにまとめたわけであります。この編集に当たり、既に報告された数々の研究の内容を参考にさせていただき、報告書の体裁をより意義あるものとすることができました。

いにしえより連綿と続く日本の歴史は道の歴史といっても過言ではありません。道は常に人との係わりの中で存在し、生きてきました。また路傍にある石仏や道標・道祖神にはその時代、時代を生きてきた人々の喜びや悲しみが刻みこまれ、私たちに語りかけてくれます。しかし、急速な社会の変化により、多くの人々に愛され、歩かれた道は、改修や新設され、次第に忘れ去られようとしています。そこで、市内に残る古道の面影を残す道をできるだけ歩き、調査し、十分といえないまでもこの冊子を刊行し記録保存をすることになりました。

調査・編集にあたっては、可能な限り、事実の把握に努めたつもりではありますが、調査もれや不十分な点、意を尽くせなかったところが多々あることはいなめません。今後、更によりよいものへと努力してゆく所存でありますので、関係各位の御指導を心からお願い申しあげます。

終わりに、この冊子が多くの人々に読まれ、活用されることにより、ふるさと宇都宮を見直す一助となれば、編集に携わった者として喜びに堪えません。

昭和60年3月

編集責任者
宇都宮市教育委員会
社会教育課長　加　藤　悦　男

〈参考文献〉

宇都宮市史　（宇都宮市）
うつのみやの歴史　（宇都宮市）
宇都宮郷土史　（徳田光淳）
宇都宮の寺院　（宇教委）
栃木県大百科辞典　（辞典刊行会）
栃木県地名大辞典　（角川書店）
栃木県神社誌　（神社庁）
栃木県中世城館跡　（県教委）
栃木の城　（下野新聞社）
栃木県の歴史　（山川出版社）
郷土史辞典栃木県　（昌平社）
日光参詣の道　（県立博物館）
奥州道一、二　（筑摩書房）
日光道　（筑摩書房）
下野国の古代文化　（第一法規）
下野の仏像　（栃の葉書房）
宇都宮の文化財　（宇教委）
宇陽略記　（高橋節子蔵）
とちぎの自然　（栃木県）
栃木の街道　（県文化協会）
日光道中図絵　（日光東照宮蔵）
栃木県郷土史散歩　（落合書店）
郷土資料事典・栃木　（人文社）

文化財愛護シンボルマークについて

このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗栱のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

昭和60年3月25日発行

宇都宮の古道

発　行　宇都宮市教育委員会
編　集　宇都宮市教育委員会社会教育課
表紙題字　桜井敬朔
印刷所　㈲井上総合印刷所

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第8号